

京都橘大学 歴史遺産調査報告 2014

武曾学校、醍醐寺成身院（女人堂）、日根莊遺跡大木地区蓮華寺、
芦屋神社境内古墳、東六甲採石場、山科（大塚・小山）石切場

2015年3月
京都橘大学 文学部

はじめに

本学の歴史遺産学科は、その前身となる文化財学科が1996（平成8）年に設置申請、同年12月に認可、1997（平成9）年4月より開設された。その後、2012年4月1日より文化財学科から歴史遺産学科へ学科名を変更した。

文化財学科を開設した当時の門脇禎二学長は「①文化財・伝統文化を尊重する心と専門的知識・技能の基礎を身につけて、研究者・職業人をめざしたりあるいはすぐ社会生活に入る学生の育成と、②体系的な「文化財学」の創出をめざす研究の進展、を目的においた」とした。

そのうちの専門的知識・技能の基礎を身につける学びの一環として、本学では2000（平成12）年3月から開始した京都市伏見区にある法琳寺跡の測量調査以降、近畿地方東北部のフィールドを中心として、発掘・測量調査を継続して行ってきた。調査には多くの学生が参加し、現場での実践的な調査の方法や技能を学び取っている。

本年度は主に、日根荘遺跡大木地区蓮華寺などの諸調査を実施した。ここではそれらの成果を中心として報告するものである。報告書を作ることもまた、学生が調査から報告書発行までの一貫した流れを知るための大切な作業であり、これらの活動全体を通し、文化遺産のより一層の周知に役立てられれば幸いである。

さて、学科名を歴史遺産と銘打ったのは、近年世界遺産や文化的景観など、多様化する文化財とその周辺学の拡がりを省みた結果である。「人類の所産のうち、考古資料、彫刻、絵画、工芸品、歴史資料などの動産遺産と、建造物、近代化遺産、都市・文化的景観、史跡、埋蔵文化財といった土地に定着した不動産遺産、これらの2つの領域の文化遺産情報を対象として歴史遺産という認識の学びに高める」ものである。

私たちがここで歴史遺産に関わる作業と勉学に向き合えるのは、ひとえに調査にあたらせていただく際の現地の方々や、多くの関係者の方々のご理解・ご協力の賜である。この場を借りて心から感謝申し上げます。今後とも文化財調査についての変わらぬご理解、ご協力、ご指導を賜りたく、お願い申し上げる次第である。

2015年3月31日

京都橘大学文学部

例　　言

1. 本書は、京都橘大学が2014年度に実施した京都市山科（大塚・小山）石切場や京都市醍醐寺成身院（女人堂）、兵庫県芦屋市芦屋神社境内古墳などの歴史遺産学科歴史遺産コースを主とした調査の報告書である。
2. 調査した遺跡と遺構には、国土座標世界測地系によってその位置を示した。
3. 本文の執筆には、第1章を岸 薫美・登谷伸宏、第2章を登谷伸宏、第3章を一瀬和夫・岸 薫美、第5章を荒木瀬奈、第6章を岸 薫美、第7章を一瀬和夫があたった。

なお、第4章の文章作成には古代学研究会奥田尚氏に玉稿を賜った。記して感謝したい。

4. 本書の編集は、一瀬和夫が担当し、各執筆者や参加学生がこれを助けた。
5. 調査にあたっては、總本山醍醐寺文化財管理室、高島市教育委員会、高島市歴史民俗資料館、書寫山圓教寺、泉佐野市教育委員会、上大木町会、兵庫県教育委員会、芦屋市教育委員会、西宮市教育委員会、芦屋神社、芦の芽グループ、兵庫県立甲山森林公園、長瀬福男、山本晃子、白井忠雄、大樹玄承、鈴木陽一、大関逸子、東原直明、金森奈保子、吉田博蔵、河原 覚、奥田 尚、奥村弥恵、瀬口眞司、山西康司、竹村忠洋、森岡秀人、西川卓志、合田茂伸、森下真企、藤川祐作、山田 晓、西森正晃、中川亀造、武内良一、久保 孝、青地一郎、福家 恭、高田裕一、望月悠佑、広瀬侑紀をはじめとする関係機関、諸氏諸嬢にご高配を賜った。記して感謝したい。

目 次

はじめに・例言

目次

第1章	2014年度の歴史遺産調査概要と経過	1
第2章	2014年度の建造物調査	4
第3章	日根荘遺跡大木地区蓮華寺の調査	11
第4章	日根荘遺跡大木地区蓮華寺南面石垣石材とその採取地	18
第5章	六甲山東南麓地域における芦屋神社境内古墳の位置付け —芦屋市域周辺の古墳との比較検討を中心に—	21
第6章	東六甲採石場甲山刻印石群（E・G地区）の踏査	33
第7章	山科（大塚・小山）石切場の踏査	38
報告書抄録		

図・表目次

図1	武曾学校平面図	4
図2	明治11年武曾学校建立棟札①	5
図3	明治11年武曾学校建立棟札②	5
図4	下醍醐伽藍配置図	7
図5	醍醐寺成身院（女人堂）平面図	7
図6	蓮花寺 位置図	11
図7	日根荘遺跡大木地区遺跡分布	12
図8	蓮華寺高台 平面図	13
図9	蓮華寺南面石垣 オルソ画像	14
図10	蓮華寺南面石垣 立面図・側面図	15
図11	蓮華寺石垣材の石種と石垣の修復線	18
図12	芦屋神社境内古墳及びその周囲の遺跡分布	22
図13	芦屋神社境内古墳周辺 石室玄室・羨道幅の比較	25
図14	芦屋神社境内古墳周辺 石室玄室・羨道幅の時期ごとの比較	25
図15	芦屋神社境内古墳周辺 古墳墳丘規模比較	25
図16	芦屋神社境内古墳周辺 無袖式石室の石室幅・長比較	25
図17	芦屋神社境内古墳周辺 石室長幅比率	26
図18	芦屋神社境内古墳周辺 石室長幅比率（無袖式石室を追加）	26
図19	芦屋神社境内古墳周辺 石室の持ち送り形態	28
図20	芦屋神社境内古墳周辺 石室長幅比率（時期ごとの比較）	29
図21	芦屋神社境内古墳周辺 石室石積の比較	29
図22	東六甲採石場甲山刻印群分布図	33
図23	徳川大坂城東六甲採石場 矢穴痕形態分類図	34
図24	徳川大坂城東六甲採石場の刻印群・関連遺跡の検出主要刻印分布一覧と想定搬出ルート	35
図25	山科（大塚・小山）石切場位置図	38
図26	伏見城と山科（大塚・小山）石切場関係地図	39
表1	蓮華寺石垣材の粒形と粒径	19
表2	蓮華寺石垣材の石種の粒形と粒径	19
表3	六甲山東南麓地域の後・終末期主要古墳一覧	30

第1章

2014年度の歴史遺産調査概要と経過

1. 2014年度の調査状況

今年度の考古学調査の現地調査作業については、夏期を中心に、大阪府泉佐野市日根荘遺跡大木地区「蓮華寺」の調査を行った。整理については、同遺跡を中心に作業をするとともに、年度下半期には兵庫県西宮市東六甲、甲山刻印石群（E・G地区）・京都市山科（大塚・小山）石切場の踏査も併せ実施した。

建造物調査については、京都市醍醐寺、兵庫県姫路市書写山圓教寺などで実施した。

本書の全体の整理作業にあたっては、歴史遺産学実習の授業を中心に、伊藤 真、岸 薫美、木田拓馬、櫻真由乃、竹村弘平、鶴山優梨子、中尾友香、二階堂元秀、長谷川智哉、福添暁久、宮島 稔、山田智司が行った。

今年度に主として歴史遺産コースが実施した主な調査の概要は、以下に紹介する通りである。

2. 泉佐野市長南中学校区の寺社建築調査

泉佐野市は、大阪府の南部に位置する。市域は、近世までの町場であった佐野村と、北中通村・日根野村・長滝村・上之郷村・南中通村・大土村の旧六ヶ村により構成される。

今回の調査は、泉佐野市の文化財総合把握調査の一環として、市域のうち長南中学校区内に所在する寺社の建造物を対象として実施した。調査は、泉佐野市建造物調査会（会長：登谷伸宏）が行い、本学科の学部生が調査補助・図面作成などを担当した。

調査方法、および内容は以下の通りである。まず、泉佐野市の長南中学校区内に所在する寺社の建造物の悉皆調査を行った。つぎに、そのなかから顕著な特徴を持つ建造物を選び、詳細調査を実施した。詳細調査の内容は、対象建造物の平面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色の記録、写真撮影である。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2014年8月4・5・11・12日、9月11・12日、11月19日、12月3日、2015年1月23日に行った。

調査参加者は、大場彩加、小塩咲由、松本真理、大地

未来、鎌田明里、後藤けいである。

3. 武曾学校の実測調査

武曾学校は、滋賀県高島市武曾横山に所在する。1876（明治9）年に創立された小学校で、現存する校舎は明治11年に建設された。明治19年の小学校令の改正にともない廃校となり、その後は武曾横山村の公共施設として使用され、現在は武曾会議所となっている。建物は、2001（平成13）年に高島町指定有形文化財に指定された（現在は高島市指定有形文化財となっている）。

武曾学校の建物については、1999（平成11）年の滋賀県近代化遺産（建造物等）総合調査において調査が行われた。しかしながら、実測調査などは実施されておらず、歴史的な評価が十分に行われているとはいえない。そこで、本年度は武曾学校の実測調査を、高島市教育委員会・武曾横山地区の協力のもと実施した。具体的には対象建造物の平面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色の記録、写真撮影を行った。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2014年8月6～8日に行った。

調査参加者は、内山知香、河合芽久実、中尾友香、西田いずみ、大地未来、岡本佳奈美、小島芽衣、後藤けい、小林夢果、竹北瑠弥、竹森綾香、中山翔太、平林勇人、細川真奈美、堀江拓斗、前田尚哉、宮田真帆、山際大貴、吉田脩平である。

4. 胡宮神社大日堂の調査

胡宮神社は、滋賀県犬上郡多賀町敏満寺に所在する。鈴鹿山脈に連なる青龍山の麓に位置しており、社伝によると、当初は、多賀町の字桜町に鎮座したが、敏満寺の創立にともない鎮守社として現在地に移されたという。戦国時代まで繁栄を誇った敏満寺は、浅井長政、織田信長の焼き討ちにより寺勢が衰えたものの、当社は、徳川家光により社殿造営が行われるなど再興が進んだ。近世以降も現在に至るまで湖東地域の有力な神社として、広く信仰を集めている。

大日堂は本殿の東側に位置する。方三間の小規模な仏堂である。大日堂の建物については、これまで文化財としての調査が入っておらず、歴史的な評価が定まっていなかった。そこで今年度は、大日堂の実測調査、および史料調査を、多賀町文化財センター・胡宮神社・敏満寺区の協力のもと実施した。具体的には、平面の実測、改

造状況と復原についての調査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色の記録、写真撮影である。

調査は、登谷伸宏を調査主任とし、2014年8月18・19日、9月18日に行った。

調査参加者は、西田いずみ、岩崎菜津美、大地未来、岡本佳奈美、垣内彩那、鎌田明里、小島芽衣、後藤けい、小林夢果、近藤千晶、榎原有紀、佐々木 悠、竹森綾香、中山翔太、平林勇人、細川真奈美、堀江拓斗、前田尚哉、宮田真帆、山際大貴、山本温可、吉田脩平である。

5. 醍醐寺成身院（女人堂）の調査

醍醐寺は、京都府京都市伏見区に所在する。成身院（女人堂）は、笠取山山麓に広がる下醍醐の伽藍のうち、金堂・五重塔などからなる伽藍中枢部の東、上醍醐への登山口に位置する。

成身院（女人堂）の建物については、これまで文化財としての調査が入っておらず、歴史的な評価が定まっていたいなかった。そこで今年度は、成身院（女人堂）の実測調査、および史料調査を、醍醐寺の協力のもと実施した。具体的には、平面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色的記録、写真撮影である。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2014年9月16・17日に行った。

調査参加者は、内山知香、中尾友香、仲谷真麻、松本真理、岩崎菜津美、垣内彩那、鎌田明里、小島芽衣、小林夢果、近藤千晶、榎原有紀、佐々木悠、竹村友玖、竹森綾香、中山翔太、前田尚哉、宮田真帆、山本温可、吉田脩平である。



写真1 武曾学校正側面全景

6. 書寫山圓教寺不動堂の実測調査

圓教寺は、姫路市中心部の北方の書写山上に所在する。平安時代中期に性空上人により開かれた天台宗の寺院である。

圓教寺の伽藍は、仁王門、摩尼殿などからなる東谷、大講堂・食堂・常行堂のいわゆる三之堂と奥の院からなる西谷により形成される。山上には中世・近世の建造物が多く現存し、2015年3月の時点では21棟が、国指定または県指定の文化財となっている。

今年度は、圓教寺の伽藍のなかで、西谷に所在する不動堂について調査を行った。不動堂は、西谷のうち奥の院にあり、護法堂の北側に位置する。圓教寺の主要な堂舎は、多くがすでに重要文化財や兵庫県指定文化財に指定されている。しかしながら、不動堂については、これまで文化財としての調査が入っておらず、歴史的な評価が定まっていたいなかった。そこで、今年度は本堂の実測調査、および史料調査を、圓教寺の協力のもと実施した。具体的には、対象建造物の平面の実測、改造状況と復原についての調査、棟札・関連文書などの調査、建立年代の確認、建築的特色的記録、写真撮影である。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2014年8月31日に行った。

調査参加者は、磯谷充子、大場彩加、小川季子、中田愛梨、西出愛央、橋本大輔、濱田里沙、山本彩有里である。

7. 日根荘遺跡大木地区蓮華寺の調査

日根荘遺跡は、大阪府泉佐野市に所在する。この遺跡は複数の遺跡で構成されるが、今回の調査はそのうちの国史跡蓮華寺の範囲の把握を目的とした。そのため、大木123に所在する上大木町会館隣地の平板測量及びその



写真2 醍醐寺成身院（女人堂）正面全景

南側にある石垣実測調査を行った。

調査は一瀬和夫を調査主任とし、2014年8月1日、4～8日、10～13日に行った。

調査参加者は、鈴木知怜、猪爪沙有里、井村 曜、岩崎奈津美、大柳美翔子、垣内彩那、黒柳絢香、小山暖加、徳泉翔平、山本温可である。

8. 東六甲甲山刻印群（E・G地区）の踏査

東六甲採石場は、兵庫県西宮市・芦屋市の丘陵部分が中心で神戸市東部（東灘区住吉川東岸付近）にまで及び位置する。近世初頭の徳川氏によって再建された大坂城の築城にかかる石垣用の石材を探取した場所であり、東六甲採石場の調査研究は近世城郭研究に大きな役割を果たした。

今回、京都橘大学が踏査したのは、甲山刻印群E・G地区である。E地区は甲山を中心とする山塊部の東辺、その東側に広がる武庫川（仁川）の形成した平野部に並行して南北方向に伸びる尾根の稜線部を主体として位置する。G地区は西宮市甲山町に所在し、甲山刻印群の中では東部に位置する。

今回の調査は、E地区の石材の実測と、あわせ大阪市



写真3 日根莊遺跡 蓮華寺・調査地から飯森山

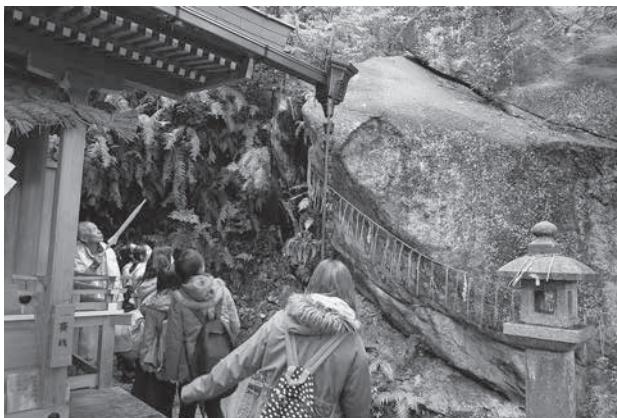


写真5 山科（大塚・小山）石切場 踏査風景1

大坂城石垣の刻印の見学も行った。

調査は一瀬和夫を調査主任とし、2014年11月1・8日に行った。

調査参加者は、鈴木知怜、井村 曜、岩崎奈津美、大柳美翔子、垣内彩那、黒柳絢香、小山暖加、徳泉翔平、山本温可である。

9. 京都市伏見城及び山科（大塚・小山）石切場の踏査

京都市山科区大塚・小山の山中に所在する石切場の踏査を行った。本学の裏山となる行者ヶ森の山の頂上付近から東及び北斜面の大塚と小山の山中に刻印と矢穴のある石が分布する。その状況については、地元の方々によって丹念に調査されているところである。ここから供給されたと考えられる伏見区に所在する伏見城の石垣と山中の残石の状況把握も行った。

調査は一瀬和夫を調査主任とし、2014年11月15・29日、2015年2月28日に行った。

調査参加者は、井村 曜、岩崎奈津美、大柳美翔子、垣内彩那、黒柳絢香、小山暖加、徳泉翔平、山本温可である。



写真4 日根莊遺跡 蓮華寺の石垣実測



写真6 山科（大塚・小山）石切場 踏査風景2

第2章

2014年度の建造物調査

1. 調査経過

今年度の建造物調査は、夏期を中心として、大阪府泉佐野市長南中学校区、武曾学校（滋賀県高島市）、胡宮神社（滋賀県犬上郡多賀町）、圓教寺（兵庫県姫路市）、醍醐寺（京都府京都市伏見区）で行った。長南中学校区・胡宮神社・圓教寺の調査については、別途報告書を刊行する予定となっており、ここでは、武曾学校、醍醐寺成身院（女人堂）の調査について詳細に報告する。

2. 武曾学校の調査

(1) 武曾学校について

武曾学校は、滋賀県高島市武曾横山に所在する。

1872（明治5）年の学制の制定により、高島郡では74の小学区が成立した。武曾学校は、第五十五番小学区の小学校として、明治9年に創立された⁽¹⁾。

その後、明治12年の教育令、同19年の小学校令により、小学校の統廃合が進み、武曾学校は、横山村の冠岡学校とともに、鴨小学校（のちに水尾小学校となる）の支校として位置づけられた。さらに、明治21年には支校が廃止されたことにより、武曾学校は廃校となる。なお、明治26年の小学校令の改正にともない、武曾横山区の生徒のために、冠岡学校が水尾尋常小学校の武曾横山校舎として用いられたが、これも1922（大正11）年には水尾尋常高等小学校に統合され、廃校となった。

武曾学校は校舎として使用されることになったものの、明治21年以降も集会施設などに利用され、第二次世界大戦中には疎開した人びとの居住施設としても用いられたという。現在は武曾区の会議所として使用されている。

(2) 武曾学校の建築的特徴について

今年度は、武曾学校の建築的特徴を明らかにするため、平面図の実測、棟札・関連文書の調

査を実施した。その結果を以下に示す。

武曾学校（高島市指定有形文化財）

桁行15.4m、梁間13.3m、二階建て、寄棟造、一間車寄付、唐破風造、桟瓦葺

明治11年（1878）棟札

やや小規模な2階建ての建物であり、正面中央に柱間二間分の幅を持つ向唐破風造の車寄を付ける。柱間に虹梁を架けて妻飾に笈形付の大瓶束を用いるなど、正面を豪華に飾っている。1階側廻りは、正面側とも窓を入れる。2階も側廻りは正面側を窓とし、外側に縁を廻し高欄を付ける。主屋北側に付属する切妻屋根の部分は後補である。

1階は、正面柱間八間、側面柱間六間の長方形平面である。内部を南北に大きく二分し、南から柱間三間分を

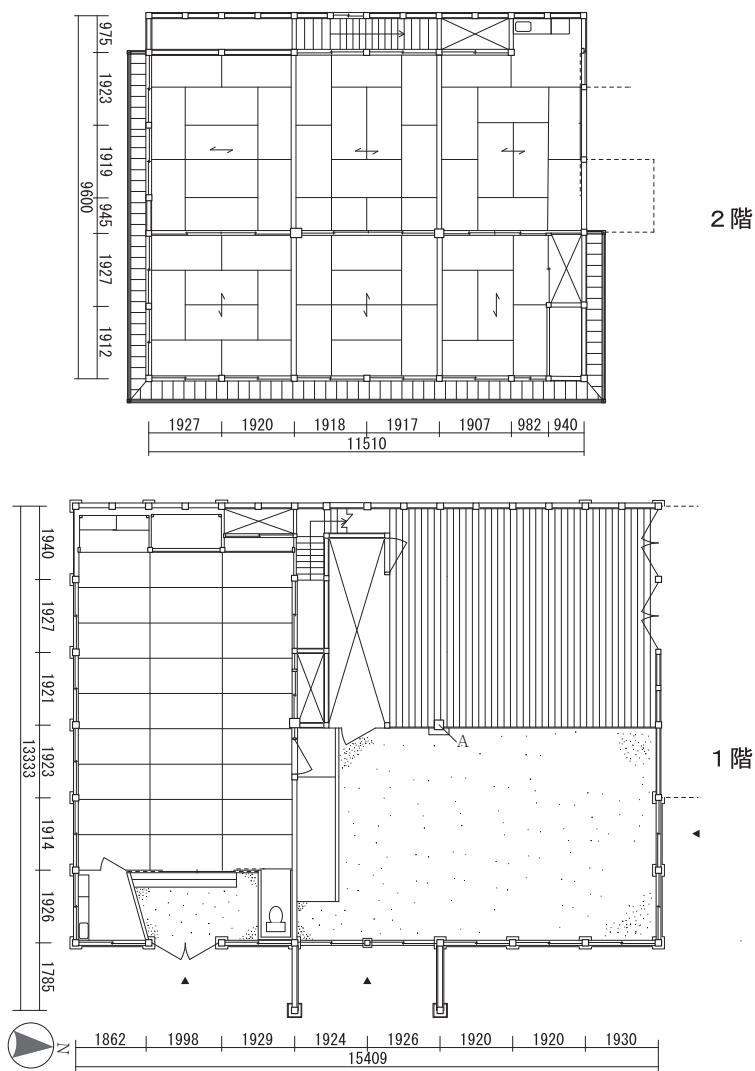


図1 武曾学校平面図



写真11 武曾学校 1階土間架構



写真12 武曾学校 1階和室



写真13 武曾学校 2階東列 南から北を見る

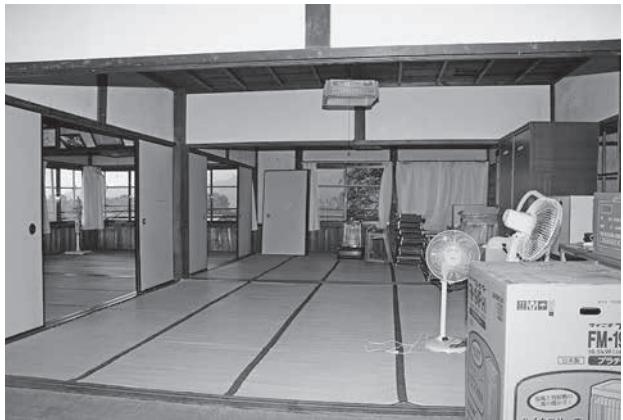


写真14 武曾学校 2階西列 北から南を見る



写真15 武曾学校 1階土間床板痕跡

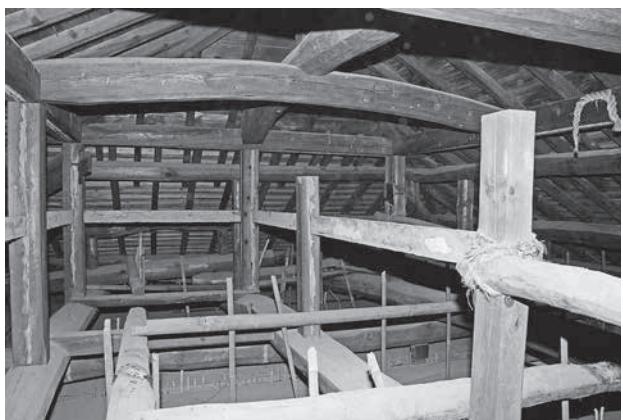


写真16 武曾学校小屋組

床上部、北側五間分を土間とする。中央の太い二本の柱は立て登せ柱である。床上部は1室で、西奥に床・違棚を設ける。さらに、北側の押入内には階段を備える。一方、土間は南北の柱筋に沿って東西に2つに分け、西側には低い床を張る。天井は化粧天井で、豪快な架構を見せる。特に西側中央には二股の梁を架けており興味深い。

2階は、東西に2列に分け、それぞれ3室で構成する。いずれも畳敷きの部屋で、天井は棹縁天井である。北東隅の部屋には、床と押入を設ける。各部屋境とも鴨居上を土壁で塞いでおり、やや閉鎖的な印象を受ける。

小屋組は和小屋である。母屋束や貫などに土壁の痕跡・壁土があり、転用材を用いていることがわかる。聞き取りによると、当初は屋根に鼓楼を置いたというが、今回の調査では棟木などに痕跡を見つけることができず、詳細は後日の調査に委ねたい。

以上が、現在の建物の概要だが、1・2階とも改造の痕跡が多く残っており、建立当初から改造を繰り返してきたことがわかる。しかし、それらの痕跡から逐一改造の過程を読み取ることは困難であり、ここでは、比較的整合性のとれる改造についてのみ述べておきたい。

まず、車寄の地覆には根太を受ける欠き込みがあり、当初は低い床を張っていたことがわかる。

つぎに、1階部分では、土間部分の側柱のうち、腰板が張られていない柱に、腰のやや低い位置に床板の痕跡が確認でき、床を張った時期があったと考えられる。聞き取り調査でも、昔は土間部分に床を張っていたといい、その裏付けとなる。ただし、側柱には足固貫の痕跡がなく、それほどしっかりとした造作であったわけではないと思われる。

また、図1のA柱から北・東の側柱に、二段に掛かる梁のうち、上側の梁の下端に土壁の痕跡があり、かつ下側の梁の上端にはその痕跡がないことから、下側のせいの高い梁は後補と考えられる。さらに、A柱の北・東面には敷鴨居の痕跡があり、この柱より北東側に独立した部屋が設けられていた可能性が高い。この部屋に当たる部分の側桁直下には棹縁天井の棹の痕跡があり、天井は棹縁天井であったことがわかる。

ついで、床上部は、床の半間前に立つ側柱、およびそれに対応する北側の柱の上部に土壁と鴨居の痕跡があり、当初は床を備えていなかったと考えられる。

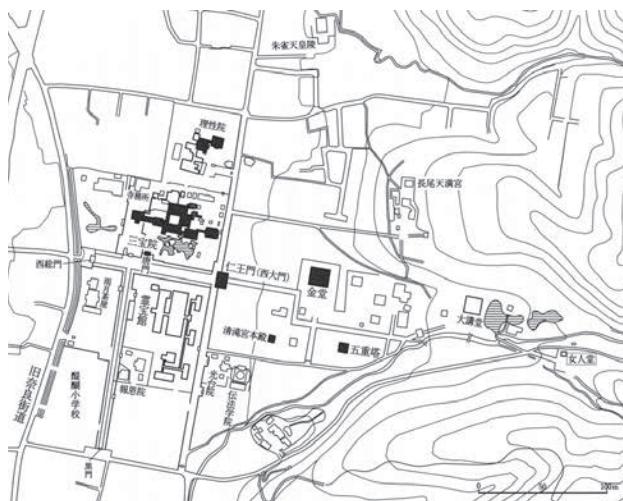


図4 下醍醐伽藍配置図

さらに、2階では、現在土壁が入っている北東の側柱に、窓と同じ高さの敷鴨居の痕跡があることから、当初は床がなく、この部分も窓であったと考えられる。

建立年代は、棟札から1878（明治11）年であることがわかる。大工は八田太四郎、肝煎は万木藤兵衛がそれぞれ勤めたことが判明する。八田家は武曾区に現在も居住しており、地元の大工による建立であった。

明治初期に建てられた学校建築の貴重な遺構であるとともに、武曾区の大工が造営に携わっており、地域の歴史を物語る建物としても非常に価値が高いといえよう。

3. 醍醐寺成身院（女人堂）の調査

（1）成身院（女人堂）について

醍醐寺は、貞觀年中（859～877年）に聖宝により創建された真言宗醍醐派の寺院である。笠取山山頂と西山麓に伽藍が展開し、それぞれ上醍醐、下醍醐と呼ばれる⁽²⁾。

成身院は、下醍醐の伽藍のうち上醍醐への登り口に位置する（図4）。女人堂の通称でよく知られている。

成身院の創建については、史料が非常に乏しい。『醍醐寺新要録』によると、1286（弘安9）年に後嵯峨天皇の皇后である大宮院の祈願所として長日御祈を行っていることがわかる⁽³⁾。また、中世には金剛輪院に隣接して設けられていたが、1598（慶長3）年、豊臣秀吉による下醍醐の伽藍整備にともない、六坊のひとつとして、三宝院の南側へ移転することとなっている⁽⁴⁾。だが、これらの記録にみえる「成身院」と現在の成身院とは伽藍内の位置が異なっており、両者がどのような関係にあるの

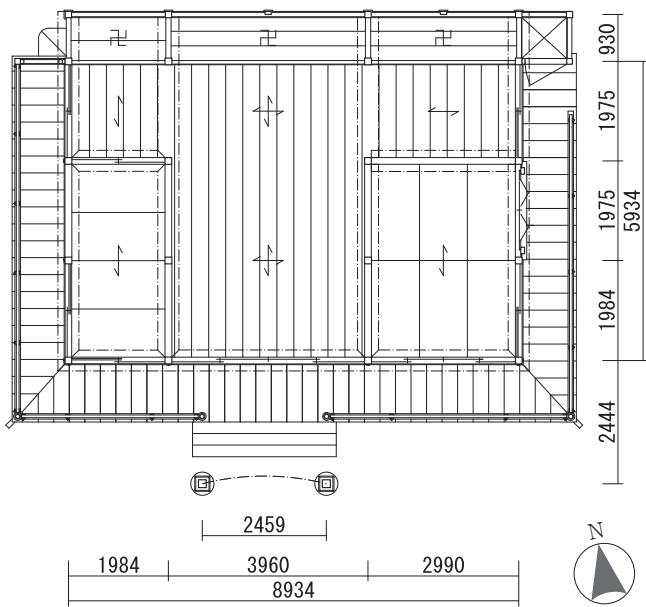


図5 醍醐寺成身院（女人堂）平面図



写真17 醍醐寺成身院（女人堂）正面詳細



写真18 醍醐寺成身院（女人堂）妻飾



写真19 醍醐寺成身院（女人堂）軒廻り詳細



写真20 醍醐寺成身院（女人堂）向拝詳細



写真21 醍醐寺成身院（女人堂）向拝見返し組



写真22 醍醐寺成身院（女人堂）内部



写真23 醍醐寺成身院（女人堂）内部見返し



写真24 醍醐寺成身院（女人堂）内部南西の部屋を見る



写真25 醍醐寺成身院（女人堂）小屋組

かは不明である。一方、現在の成身院が建つ場所に仏堂が造営されたのは、上醍醐の准胝堂が第十一番札所であったことと関係するようである。近世になり庶民による巡礼が盛んとなるにしたがい、女性の巡礼者も増加した。だが、上醍醐は女人禁制であったため、准胝堂に参詣できない女性の巡礼者が納札したのが、成身院（女人堂）であった。

（2）成身院（女人堂）の建築について

今年度は、成身院（女人堂）の建物の建築的価値を明らかにするため、平面の実測、痕跡調査などを実施した。その成果を以下に示す。

成身院（女人堂）

桁行8.9m、梁間5.9m、入母屋造、向拝一間、背面軒下張出、棟瓦葺

20世紀前期

角柱 切目長押 内法長押 頭貫 大斗肘木 木鼻 中備なし 二軒半繁垂木 妻飾木連格子 向拝角柱 虹梁 形頭貫 木鼻 三斗枠肘木 実肘木 中備薹股 一軒半繁垂木

やや小規模な建物で、南面して建つ。正面柱間三間、側面柱間三間だが、正面の柱間を大きくとっており、長方形平面となる。さらに、正面では、東端間の柱間を西端間に比べ広くとり、向拝もそれに合わせて西寄りに設けるため、左右非対称の立面となっている。

軒は小舞を打った二軒で、地垂木に強い増しを付ける。これは、下醍醐の清瀧宮拝殿・旧光台院本堂にも共通し、近代に再建された醍醐寺の建物の特徴と考えられる。さらに、この建物では、飛檐垂木を地垂木に対して一本お



写真26 醍醐寺成身院（女人堂）棟札

きに配しており、珍しい。組物木鼻などの彫刻は線が細く、古風なつくりとなっている。

内部は、東西方向に三分する。中央間は板張りで、内法長押・蟻壁長押を廻す。天井は前方柱間一間分を格天井、後方を小組格天井とする。左右前方に設けた部屋は、正面柱間の非対称を反映し、それぞれ六畳と四畳となる。室境の鴨居はいずれも付桶端としており、古風である。最奥部には背面軒下に張り出して三つ並びの仏壇を備える。装飾がほとんどなく、端正な印象を受ける。

小屋組は和小屋である。地垂木のなかには尻が軒桁よりもやや奥まで伸びるものもある。棟束に棟札が打ち付けてあるが、今回の調査では取りはずさなかった。

以上がこの建物の概要だが、室内には改造の痕跡が多く残っている。

まず、室内中央奥寄りの二本の柱には、いずれも北側の足元に敷居の痕跡があり、かつ鴨居に二本溝が残ることから、両脇間には2室ずつ部屋が並んでいたことがわかる。

つぎに、中央の仏壇には、落掛の下端、および東側の柱の西面に釘穴と材の当たりが残る。さらに、これらの痕跡は仏壇框よりも下にもある。したがって、当初は仏壇の上部と左右に小壁が付き、仏壇框より下は格狭間、または板壁が入っていたと考えられる。

また、東側の仏壇は、西側の柱の東面に釘穴と材の当たりがある。中央の仏壇と同様、左右に小壁を付けていたと思われる。仏壇の奥まで伸びる長押には、左右とも

落掛の前に欠き込みがあり、当初は長押が廻っていたことがわかる。

棟札を取りはずしておらず、そのほかに建立年代を示す史料はない。よって、ここでは部材の風蝕から、20世紀前期の建立と考えておく。

札所としての醍醐寺の歴史を良く表す貴重な遺構であるとともに、上醍醐への登り口の景観を構成する一要素としても重要であるといえよう。

注

- (1) 滋賀県における小学校制度に関する事実関係については、つぎの文献を参照。『高島町史』(高島町役場 1983年)。
- (2) 醍醐寺の歴史と伽藍については、その概略を『京都橘大学 文化財調査報告2012』(京都橘大学文学部 2012年)で述べたので、そちらを参照していただきたい。
- (3) 総本山醍醐寺監修『醍醐寺新要録』下(宝蔵館 1991年)。
- (4)『義演准后日記』(史料纂集)慶長三年五月二十七日条。

第3章

日根莊遺跡大木地区蓮華寺の調査

1. 日根莊遺跡について

日根莊遺跡が所在する泉佐野市は大阪府の南西部に位置する。東を貝塚市・熊取町、南と西を田尻町・泉南市、南を和泉層群からなる和泉山脈より和歌山県と境を分けている。市域は北西—南東方向に長いため、和泉山脈から大阪湾の直線距離10kmほどの間で、山間部・丘陵部・平野部に分かれ、変化に富んだ地形を呈する。主要河川は、貝塚市との境を流れる見出川、熊取町との境を流れる佐野川、泉南市との境を流れる樅井川などがある。上流は三瀬川、犬鳴川と呼ばれる後者の樅井川は、水量も豊富なことから水田などの灌漑用水源として活用され、市内上之郷・長滝地区では条里の痕跡が残る。

その痕跡が良く残る場所は日根莊と呼ばれる。日根莊は、そもそも1234（天福2）年に立券され、天文年間（1532～54年）に至るまで九条家領として存続した莊園である。範囲は、現在の泉佐野市域のほぼ全域にあたる。日根莊は約300年間にわたり、莊園領主、守護勢力、紀州根来衆徒などの支配勢力が錯綜した中世のなかにあつ

て開発の歴史が継られる。九条家にはその間の古文書等が数多く残り⁽¹⁾、日根莊の具体的な様相が分かる。

こうした資料の中でも特に著名なものは、1316（正和5）年の「日根野村荒野開発絵図」と、1501（文亀元）年から足掛け4年にわたって前関白、領主の九条政基が滞在した際に記した「政基公旅引付」である。前者の正和の絵図は、開発の拡大計画の際に作成されたものであるが、当時の日根野村の姿をよく伝え、中世農村の復元にあたっては欠かすことのできない歴史資料となっている。一方、旅引付は、政基が村の日常や事件を克明に書き綴った戦国時代の惣村のあり方を伝える。

2. 蓮華寺について

今回調査を行った蓮華寺は、「政基公旅引付」に1401（応永8）年創建され、年末年始に、政基にあいさつしたという記述がある。これは日置莊遺跡のなかでも丘陵部の大木地区に含まれる。この地区は、泉佐野市の最南端で和歌山県と境を接し、南を和泉山脈、北を雨山、土丸地区の小富士山などの標高300～350m級の山々に取り囲まれた天然の要害地の形をなしている。その中央を南北に流れるのは水量豊富な樅井川であり、それにともなって河岸段丘が形成され、細長い小盆地をも形成する。また、古くから和泉地方から和歌山の粉河・根来にぬけた粉河街道や樅井川の北側では貝塚市方面、河内へとぬ



図6 蓮華寺 位置図

ける道がのび、交通の要衛でもあった。

現在の入山田地区では、上大木と土丸の2ヶ所の蓮華寺がある。今回調査する上大木の蓮華寺は南側のもので、泉佐野市大木116に位置する。国史跡の種別は村堂であり、集会所を兼ねる⁽²⁾。境内地南側には中近世の石造物が設置されている。村堂が立地する段丘端は、西にある樅井川と南に面してそこに流れ込む支流の風呂（古）川、2方に囲まれる。南から大木地区に進入するならば、その玄関口のようにみえる。さらに樅井川をはさんで西方対岸に飯森山がかまえ（写真3）、両者合わせ、城門のようにも見える。一方、蓮華寺より東方背後は段丘地が広がるが、その上大木の段丘面を一望する高台には年末年始、政基に挨拶したという香積寺がある。また、樅井川のやや下流の高所には犬鳴七宝龍寺の末寺、1401（応

永8）年の棟札がある西光寺、さらに下流に禪徳寺がある。これらの寺は上大木の段丘部を囲む（図6）。

3. 調査の目的と成果

今回の調査は、蓮華寺の村堂がのる段丘端の高台が西側の樅井川にむけてその範囲が西に広がるか否かということと、その区域と村堂南にある石垣がこの高台域とのような関係をもつのかを把握するために、高台の100分の1縮尺の平板測量と、20分の1縮尺の石垣実測、オルソ3D画像の作成を行った。

（1）高台の調査

高台は現状でT.P.138.9~140.5mの高さであり、村堂がおおむね140mの高さで北東の段丘付け根と接続す

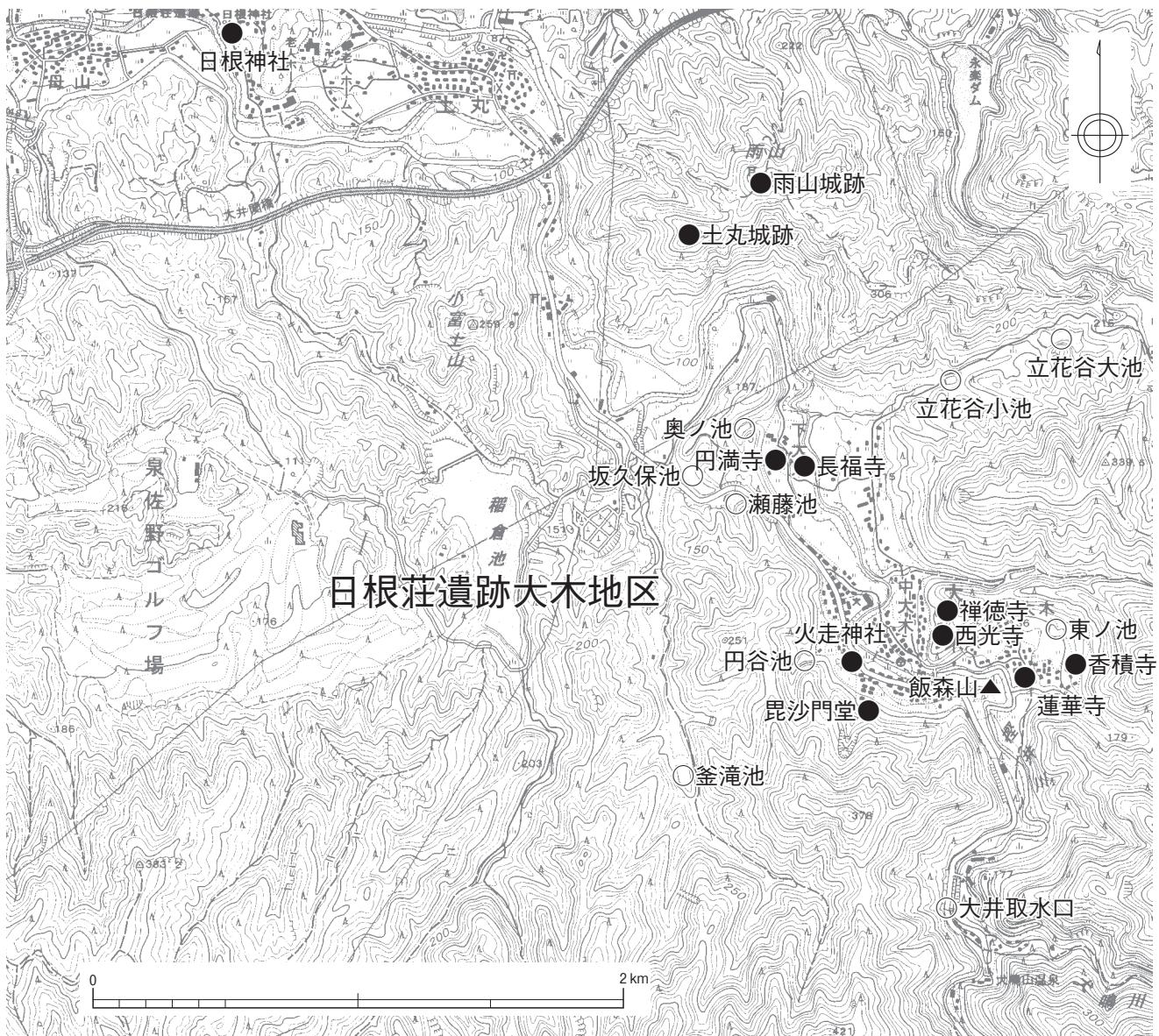


図7 日根莊遺跡大木地区遺跡分布

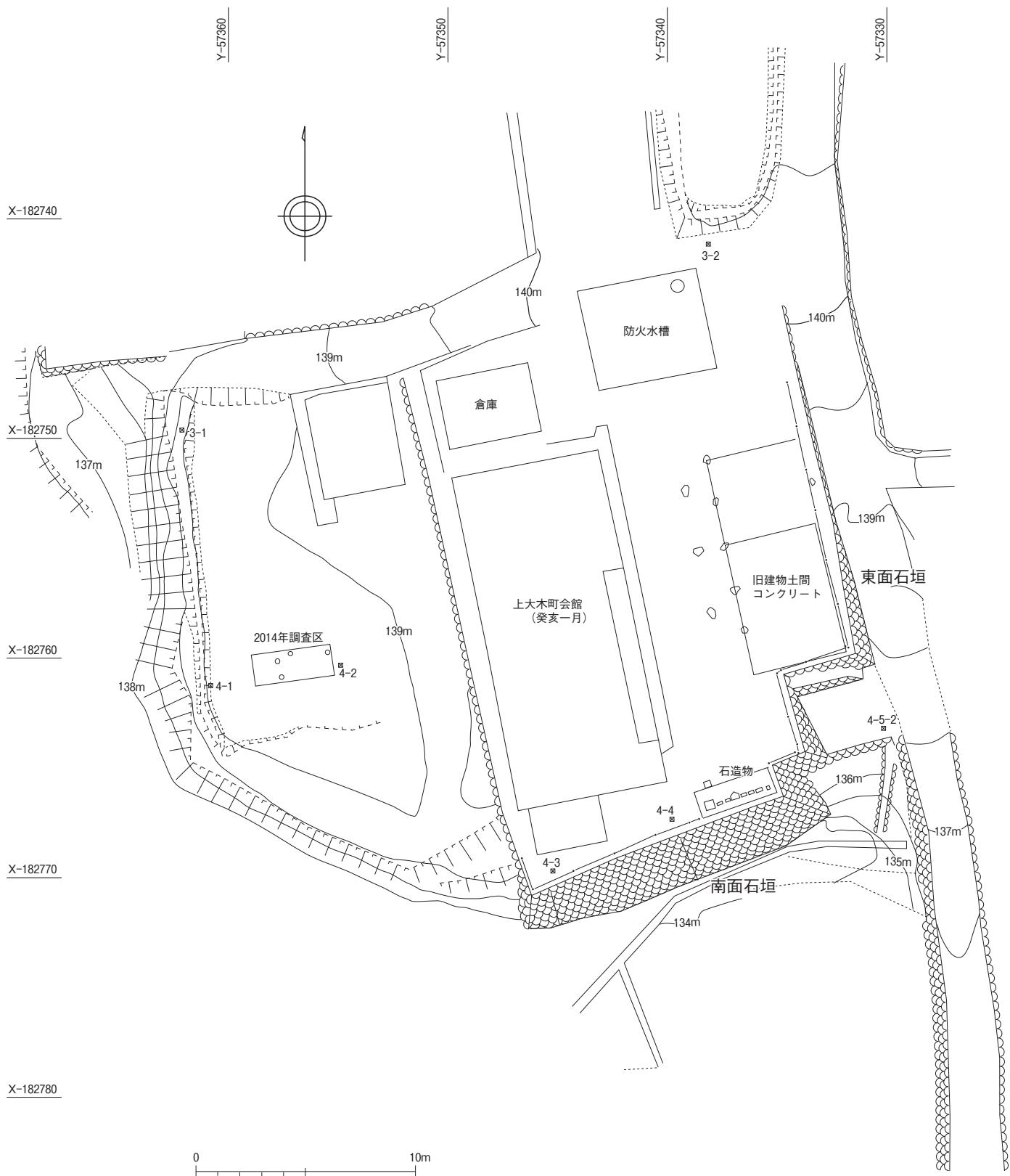


図8 蓮花寺高台 平面図

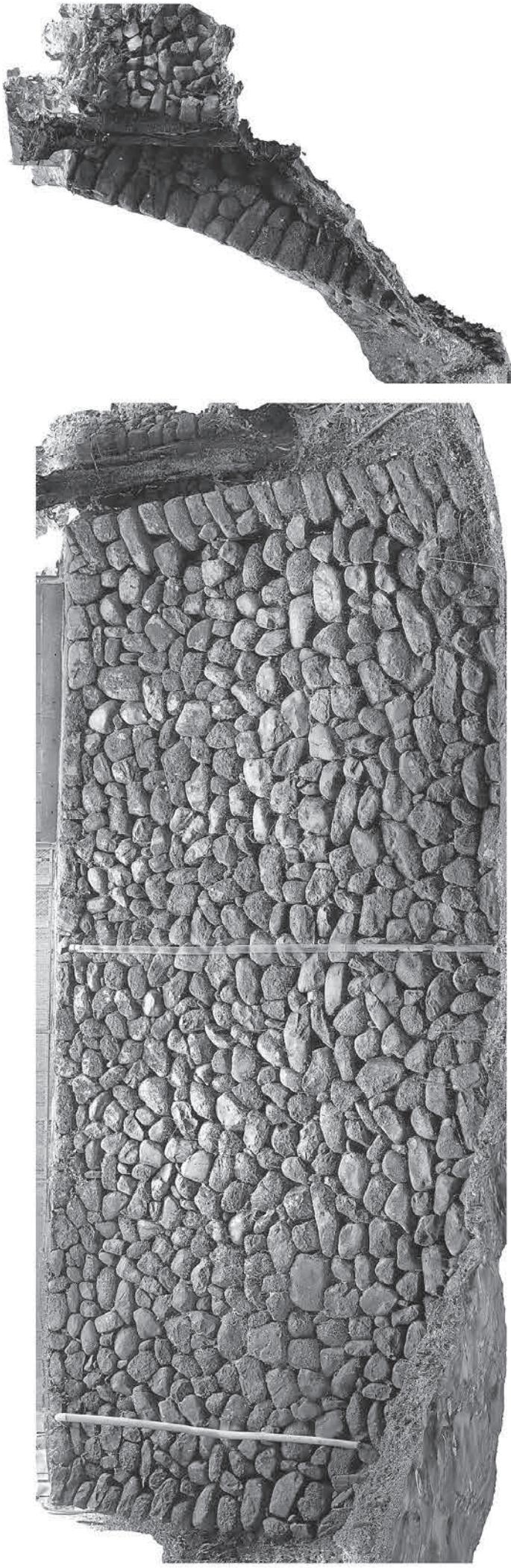


図9 蓮花寺南面石垣 オルソ画像

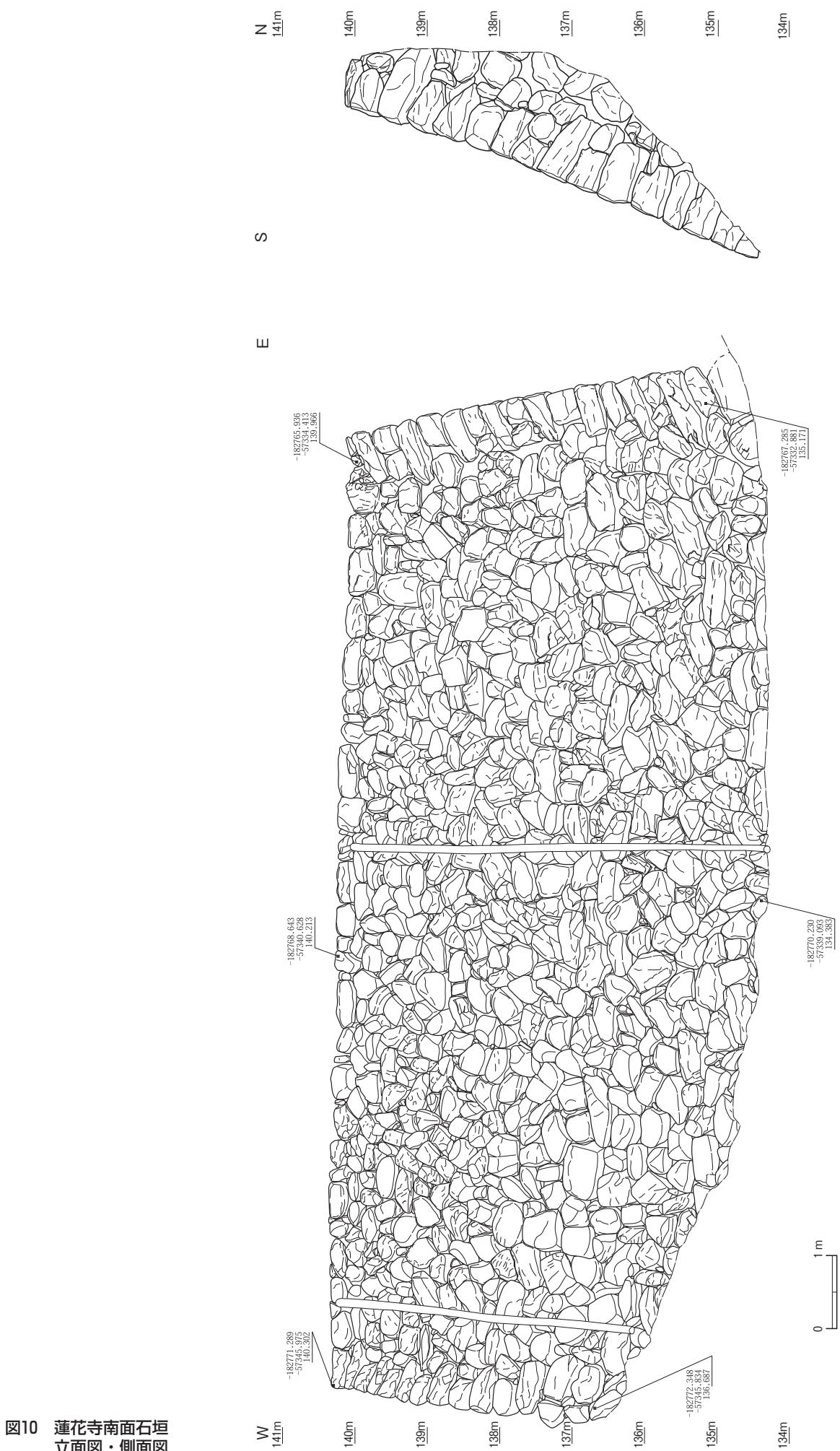


図10 蓮花寺南面石垣
立面図・側面図



写真27 蓮華寺 南面石垣全景（南南東より）



写真28 蓮華寺 南面石垣南面東隅（南東より）



写真29 蓬華寺 南面石垣東隅角・入り隅部（南東より）



写真30 蓬華寺 南面石垣東半（南東より）



写真31 蓬華寺 南面石垣西側面（西より）



写真32 蓬華寺 南面石垣入り隅部及び東面石垣隅角部（南東より）



写真33 蓬華寺 東面石垣（北東より）



写真34 蓬華寺 石造物全景（北西より）

る。現在、村堂がのる範囲は25×15mの南北に長い長方形を呈し、旧地形が低くなる南辺に6.0mの高さの石垣が取り付き、その高さをまもる。その西辺は1mほどの石垣によって一段低くなる。この低くなった部分を泉佐野市教育委員会が併行して調査を行った（図8）。地表下20cmほどで地山の黄褐色砂礫が検出されている⁽³⁾。出土遺物には小片であるが瓦器碗があり、日根莊が整えられた13世紀後半ごろには西側も含めて一連の高台となっていた可能性が高い。すなわち、多少の段差はあるものの東西総じて、一辺25mの正方形に近い平場を形成していたことになる。

（2）南面石垣の調査

石垣の最も大きなものは蓮華寺の南側を囲う6.0mの高さをもつものである。本調査では、この南石垣の実測を行うとともに、空中測量によるオルゾ画像の作成も実施した（図9）。その結果、南面部分は、上辺で13.4m、下辺で14.9m、高さ6.0m（T.P.140.3～134.3m）を測る。上場は東が0.3m低い。両端の隅石は一直線に80°傾く。石垣石材にはさみこまれるような遺物を確認することはできなかった。

南面石垣の構造は、野石をそのまま用い、面を調整する特徴と隅石については棒状、隅丸の石材を組んで明瞭ではないが算木積みを意識していると見てよい。石垣の側面から見る反りは下3分の2の勾配が68°であり、上3分の1が73°とわずかに垂直に気味に立ち上がる傾向をみせるが、本来、さらに上部に積み上げられていたとしても、垂直にはならずに終わる。こうした使用の野石、隅石の積み方などの特徴から、もっとも古く見積もるなら16世紀末ごろにさかのぼってもよいと考える。この石

垣の東側に続いて、北東に入り隅になって石垣が続く。この部分の石垣を小石材でさらに被う築かれた石垣があるが、これは北に接する取り壊された旧建物にともなうものである。これに被われたもとの石垣の一部は南面する石垣とつながる可能性が高い。

石垣石材については、次の章に奥田尚氏からの玉稿がある。参考にされたい。

4. まとめ

同時に行った泉佐野市教育委員会の発掘調査では、蓮華寺西側隣地に複数の柱穴が確認された。鎌倉時代にさかのぼる建物が存在した可能性が出てきた。

さて、蓮華寺の石垣は図6の位置図に示すように、樅井川が南から流れ西に屈曲する地点の右岸に設置された。その屈曲点に向かって東から流れ込む支流と平行して面をなす。つまり、支流は樅井川の南北に対して直交する堀割的な効果をもつ。この自然の防御機能はその当初より利用されたと考える。この高台に設けた平場は、さらに南面して高さ6.0m以上の高石垣をもつことで、総じて急勾配につくりあげた。そして、下部の堀割状となつた谷状地形の法面も合わせ、10m以上の防御面を南方方面に対してもつことになった。この造作は安土桃山時代頃かと考えられる。

注

- (1) 宮内庁書陵部所蔵
- (2) 中岡勝・東原直明2015『日根莊遺跡範囲確認調査・詳細分布報告書』泉佐野市教育委員会
- (3) 金森奈保子・鈴木知怜2015「日根莊14-1区（蓮華寺）」『泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 平成26年度』泉佐野市教育委員会

第4章

日根莊遺跡大木地区蓮華寺 南面石垣石材とその採石地

上大木の集会所の南側にある石垣は自然石を積み上げた立派な石垣である。この南面石垣の石材622個を裸眼で観察した。その観察結果である石垣の石積、石材の形状、石種とその特徴、石材の採石地、石材の運搬労力について述べる。

1. 石積について

この石垣の角は算木積となっており、南面には少なくとも4回の修復の跡がみられる(図11)。全体は野づら積であるが、落とし積の部分が多々みられる。使用されている石材は自然石の表面をはつた石(ハツリ石)が多く、自然石をそのまま使用したものは僅かである。露岩を割って切り出したような石、大きな転石を割ったような痕跡はみられない。また、石垣を積み直した跡が少なくとも4回みられるが、①～④の修復線で示す範囲内での修復部毎での石材の違いは認められない。

2. 石材の形状

石材は自然石の一部をはつられているものが多い。石材をみかけの長径で区分すれば、長径10cm以上25cm未満

が55個(9%)、25cm以上50cm未満が348個(56%)、50cm以上75cm未満が193個(31%)、75cm以上100cm未満が22個(4%)、100cm以上125cm未満が4個(1%)となり、長径が25cm以上75cm未満の石が541個と、全体の87%を占める。石材に残る自然面の形状に基づき粒形で区分すれば、角が205個(33%)、亜角が371個(60%)、亜円が46個(7%)となり、円がみられない。自然石の表面は川原に点在する石のような様相を呈し、海岸にみられるような滑らかなものはみられない。粒形と粒径の関係をみれば、どの粒形でも25cm以上50cm未満のものが一番多く、次に50cm以上75cm未満のものとなり、突出した特徴は認められない(表1)。

3. 石種とその特徴

石垣に使用されている石材の石種は、礫岩、礫質砂岩、砂岩である。石種と使用個数の関係は、礫岩が141個(23%)、礫質砂岩が48個(8%)、砂岩が433個(70%)で、砂岩が7割を占める(図11・表2)。これらの石種の特徴について述べる。

礫岩: 色は灰色～褐色である。構成粒は色が青灰色、灰白色、暗灰色で、石基がガラス質の流紋岩である。青灰色の流紋岩は、粒形が亜円～円、粒径が2～30mm、量が多い。灰白色的流紋岩は、粒形が亜角～亜円、粒径が2～8mm、量が僅かである。暗灰色の流紋岩は、粒形が亜角～亜円、粒径が2～15mm、量が多い。基質は緻密で

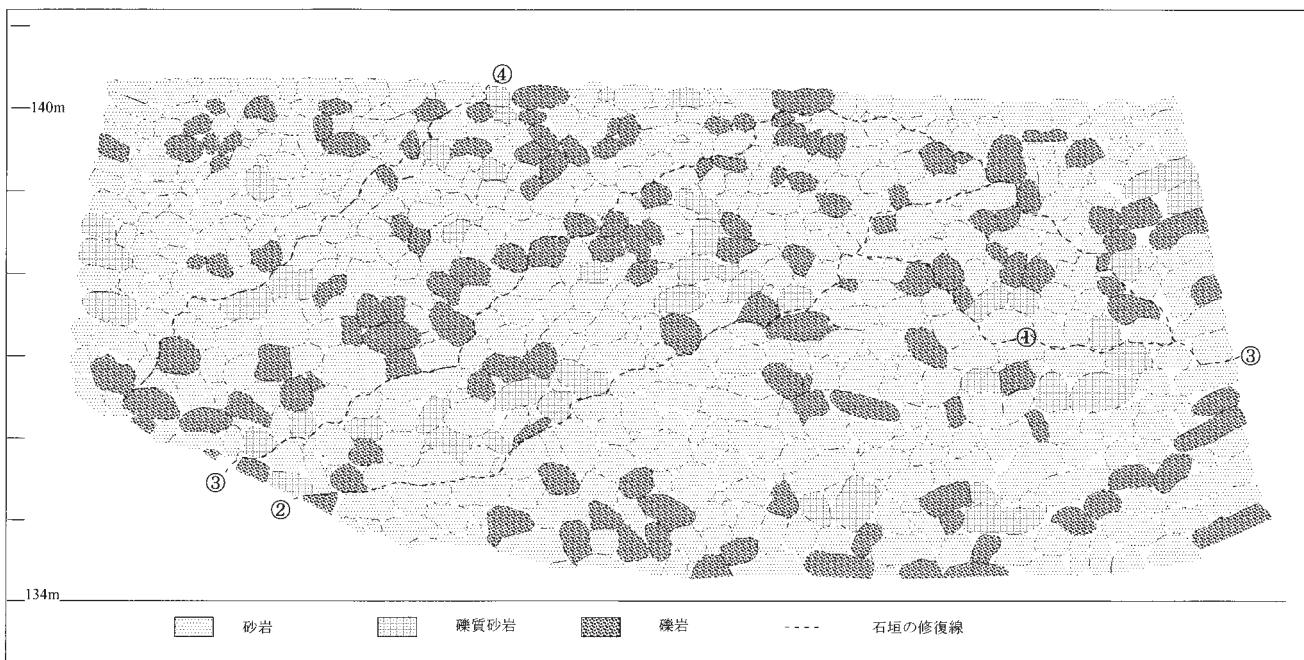


図11 蓮華寺石垣材の石種と石垣の修復線

表1 蓮華寺石垣材の粒形と粒径

粒形	みかけの粒径(cm)					合計
	5~24	25~49	50~74	75~99	100~124	
角	18	117	60	6	4	205
亜角	24	212	120	15		371
亜円	13	19	13	1		46
円						
合計	55	348	193	22	4	622

ある。

礫質砂岩：2mm以上の礫が砂岩中に散在して含まれる場合、礫が砂岩中に層をなして含まれる場合がある。ここで述べている砂岩や礫岩の構成粒の種類は同じであり、礫質砂岩と区分したのは砂岩や礫岩となる粒径のものが一石に混在していることによるものである。

砂岩：色は灰色、淡茶灰色である。構成粒は流紋岩、石英、長石である。流紋岩は石基がガラス質で、灰色や黒色を呈する。灰色の流紋岩は、粒形が亜角～亜円、粒径が1.0～1.5mm、量が中である。黒色の流紋岩は、粒形が亜角～亜円、粒径が0.5～1.5mm、量が中である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が1.0～1.5mm、量が中である。長石は灰白色、粒形が角、粒径が1～2mm、量が僅かである。基質は緻密である。

4. 石材の採石地

貝塚市壽原付近には白亜紀後期に堆積した和泉層群の下部層が分布し、その泥岩から白亜紀末期のアンモナイト等の化石を産する。ここより南方に分布する上位の地層は砂岩を主とし、礫岩が僅かに含まれようになる。上大木集落の西方にある樅井川の流域では和泉層群の砂岩層が広く分布し、部分的に礫層や礫質部を伴う。これらの地層を形成している砂岩や礫岩の構成粒は主としてガラス質の流紋岩（溶結凝灰岩）で、石英や長石が含まれる。岩石分布の影響の為か樅井川の川原石には砂岩が多く、礫岩が僅かである。

調査した石垣の使用石材では、粒形と粒径の関係に突出した特徴は認められない。また、石種別にも石種と粒径の関係に於いてほぼ同じ傾向を示す。石材の表面は川原石様である。石種の岩相は和泉層群の砂岩や礫岩の岩相と同様である。以上のことから、ほぼ同じ地点の川原で石材として使用できる川原石を採取されたと推定される。樅井川や南方の谷（風呂川）の石の粒形を地域毎に調査すればより詳細な採取地が推定されるであろう。

表2 蓮華寺石垣材の石種の粒形と粒径

石種	粒形	みかけの粒径(cm)					合計
		5~24	25~49	50~74	75~99	100~124	
礫岩	角	3	30	11	3	1	48
	亜角	8	51	25	2		86
	亜円		4	2	1		7
	円						
	小計	11	85	38	6	1	141
礫質砂岩	角	1	8	6	1	1	17
	亜角	1	13	11	4		29
	亜円			2			2
	円						
	小計	2	21	19	5	1	48
砂岩	角	14	79	43	2	2	140
	亜角	15	148	84	9		256
	亜円	13	15	9			37
	円						
	小計	42	242	136	11	2	433
合計		55	348	193	22	4	622

5. 石材の運搬労力

石材の運搬に関して、1人が担ぐ重量は40～50kgと推定され、多くの人により担ぐ場合は一人が負担する重量を少なく見積もらねばならない。また、運ぶ道の条件も考慮しなければならない。

石垣の石材で個数が一番多い25cm以上50cm未満の石の重量は70～100kgと推定され、1mを超す大きな石で400kg程と推定される。担いで運んでも短い距離であれば100kgを2人、400kgであれば8～10人で担ぐことができる。運搬に関して特に修羅道を造る必要もなく、3尺幅の山道があれば運べることになる。

石垣材の採石地を上大木集落の西方の樅井川の川原と石垣南方の谷と推定し、この距離を10人で一日に8往復するとすれば、30日ほどで622個の石材を運び終えることになる。しかし、南方の谷からでは一日に運ぶ回数も増えることだろう。一日8往復の見積よりも回数が多くなるかも知れない。石材の収集に関しては10人おれば一月以内に終えることができる仕事となる。しかし、最大の重量となる角石では8～10人が一石を運ぶのに必要であり、5～6人が日数を増やせばできる仕事ではない。この石垣は8人以上の人のがいなければ造れない石垣といえる。

6. おわりに

上大木の集会所の石垣には和泉層群起源と推定される角～亜円の川原石が石材として使用されている。これら石材の採石地として上大木集落西方の樅井川の川原、石垣南方の谷（風呂川）が推定される。石垣の石材は10人おれば、30日程で集石でき、人数が多くなれば日数は少なくて済むことになる。しかし、石垣を積むことになれば、各石材の使用位置を形状から決め（石選び）、一石ずつ、面合わせをしながら積まなければならない。集団で多くの人が集まって積むことはできない。石積みに要

する日数については石工によっても異なるだろう。

集会所の前にある広場の南端に青面金剛像を中心の中・近世の石造物が並べられている（写真34）。これら石造物の石材の石種は中粒砂岩で、岩相的に和泉層群の砂岩の岩相の一部と似ている。上大木集会所横の石垣の石材と同質のものもあるが、石造物に加工される以前の大きさと石垣材の大きさと比べれば、石造物には石垣の石材よりも遥かに大きな石材が必要なものが多い。これらの石造物の生産地については和泉層群の砂岩が分布する地と推定されるが、さらに、生産地を絞るには石工の存在、石切り場跡の確認などの調査が必要である。

第5章

六甲山東南麓地域における 芦屋神社境内古墳の位置付け —芦屋市域周辺の古墳との比較検討を中心に—

1. 本章の目的

芦屋神社境内古墳は、兵庫県芦屋市東芦屋町20番3号の芦屋神社敷地内に所在する横穴式石室を持つ円墳である。本学では、2013年8月1日～同年9月3日、同年12月20日に墳丘測量・石室実測調査を行い、2013年度の報告書にて調査成果を報告した⁽¹⁾。今回はその調査の総括に相当する調査成果をもとにした周辺古墳・石室との比較・検討を行うこととする。この検討の中で芦屋市域周辺を含む六甲山東南麓地域の横穴式石室については、森岡秀人氏、芦屋市教育委員会、芦の芽グループ、西宮市教育委員会、関西大学考古学研究室などによる重厚な既往の研究がある⁽²⁾。そこで本章では、これら研究を基礎としつつ、芦屋神社境内古墳の石室を主な対象とし、八十塚古墳群や城山古墳群などの芦屋市域周辺に分布する前後する時期に築造されたと考えられる古墳・石室との比較を行うことで、芦屋神社境内古墳の特徴と時期について検討し、その上で六甲山東南麓地域での芦屋神社境内古墳の位置付けを行うことを目的とする。

2. 2013年度芦屋神社境内古墳調査の概要

まず、本学が行った芦屋神社境内古墳の墳丘測量・石室実測調査の成果について整理する。より詳しい内容は2013年度報告書を参照して頂きたい⁽³⁾。

芦屋神社境内古墳については、1971年に墳丘測量・石室実測が行われており、その際に作成された実測図が公表されていたが⁽⁴⁾、約50年前の図面であり、以降の経年変化状況や周辺地形なども含めたより詳細な図面を作成するため、2013年度に墳丘と石室の再測量・実測調査を行った。調査方法は、墳丘周辺については平板測量を行い、20cmセンター・縮尺1/100の図面を作成した。石室実測については、手測りで行い、縮尺1/10の図面を作成した。

本古墳は、六甲山東南麓の芦屋川と宮川の形成する扇状地の扇頂部付近の斜面上に位置しており、南側の大坂湾への眺望が開けている。墳頂部の標高はT.P.87.75mである。現状では、周辺に明確な古墳は見あたらず単独

で立地しているように見えるが、『芦屋市史』などの記述によると、本来は背後の丘陵などに数基～数十基の古墳が見られたようである⁽⁵⁾。

墳形は円墳であり、径約19m、高さ約3.5m、周溝（掘割）を含めた全長は約24.5mとなる。墳丘中心部には墳丘盛土が残存している可能性が高く、現状では北側T.P.86.2m、南側T.P.84.8m付近で墳丘の傾斜が急になり、中心部の9.5×6.0m付近が橢円形に盛り上がっており⁽⁶⁾。この部分の立面觀は截頭円錐形であり、墳頂部に平坦面は見られない。また、石室の羨道部付近の露出や周辺建物による削平などから、本来は東・南・西方向に墳丘裾が伸びていた可能性が高い。

芦屋神社境内古墳は埋葬主体として1基の横穴式石室を内蔵する。以下に石室の基本データを整理する。

平面プラン：右片袖式、玄室平面は長方形

主 軸：S-8°-W

全長(現状)：約10.4m

羨道(現状)：長さ(現状) 6.2m、幅(北端) 1.2m・
(南端、石燈籠付近) 2.0m

玄 門 部：幅1.4m、高さ1.2m

前 壁：幅1.2m、高さ0.8m

玄 室：長さ3.6m、幅1.7m、高さ(最大)2.1m

使 用 石 材：奥田尚氏の岩石観察によると、すべて
自然石であり、黒雲母花崗岩A・花崗
斑岩・石英斑岩・輝石安山岩の4種類
の石材が使用されているとする⁽⁷⁾。

留意点として、石室床面は未検出であること、天井石が残存している玄室・玄門部以外の羨道部は、側壁や床面に後世の改変が見られること、現状では古墳そのものが神社として祀られているため、石室内部には複数の神社関連石造物が見られることの3点があげられる。

本古墳の石室にはいくつかの特徴が見られる。特に玄室側壁に断面が屋根形になる持ち送りが見られることが本学の調査で明らかとなった。両側壁の上から2～3段目から傾斜角度が60～70°に変化しており、奥壁付近に近づくにつれて傾斜角度が急になる。奥壁最上段の3石の内、両端の2石が奥壁と両側壁の角に架けるように配置されていることから、意識的に持ち送られていると考える。他に、奥壁最上段の石材と天井石の積み方から、天井石が奥壁完成以前に設置された可能性があることや、玄室の平面形がやや斜めになった長方形であることなどが特徴としてあげられる。



図12 芦屋神社境内古墳及びその周囲の遺跡分布

3. 六甲山東南麓地域における後・終末期古墳の様相

ここでは、比較対象となる芦屋市域周辺の様相の判明している横穴式石室を持つ後・終末期古墳群について概観する（図12、表3を参照）。

（1）八十塚古墳群

芦屋市北東部から西宮市西部にかけての丘陵上から麓周辺に分布する。6世紀後半～7世紀半ばにかけて築造された数十基の古墳が確認されているが、本来は100基前後の古墳が分布していたと推定されており、西摂地域でも大規模な後期群集墳である。立地的には、摂津地域中心部の平野部の西端の丘陵上に位置しており、芦屋神社境内古墳や城山古墳群などと比較して、東方向の眺望も開けていることからより広範囲から視認性があったと考える。地形状況から以下の5つの支群に区分される⁽⁸⁾。

岩ヶ平支群は、標高60～100m付近に分布する。八十塚古墳群内最大規模の支群であり、現在までに50基前後の古墳が密集している様子が確認されている。後述でも検討を加えるが、墳丘・石室の規模・内容などにおいてややばらついた印象を受ける⁽⁹⁾。

苦楽園支群は、西宮市域の標高100～120m付近の丘陵上に分布する。8基前後の古墳が確認されており、すべての古墳が無袖式石室を持つことが特徴的である⁽¹⁰⁾。

老松町支群は、標高80～110m付近の芦屋市と西宮市の丘陵部にかけて分布しており、4基前後の古墳が確認されている。1・2号墳の2基は芦屋市、3・4号墳の2基は西宮市に分布する。特に老松3号墳は南・南東方向の眺望が開けており、残存状況も比較的良好であることが特筆される⁽¹¹⁾。

朝日ヶ丘支群は、標高90m付近に分布している。2基の古墳が確認されているがいずれも残存状況は悪い⁽¹²⁾。

剣谷支群は、八十塚古墳群内で最高所である標高140m付近と150m付近に2基の古墳が分布している。いずれも横穴式石室が確認されているが、朝日ヶ丘支群と同様に残存状況は比較的悪い⁽¹³⁾。

（2）城山古墳群

芦屋市西部の丘陵上から麓周辺に分布する。周辺には東に芦屋川、南から北西に高座川が流れる。現状で20基前後の古墳が確認されており、この中には後述する山芦屋古墳と旭塚古墳も含まれる。分布状況はやや点在的で

あり、八十塚古墳群の特に岩ヶ平支群に見られるような密集性は認められない。各古墳の内容を概観すると、正方形に近い平面プランを呈する大型の石室を持ち、金銅装馬具を副葬する山芦屋古墳、終末期に築造された多角形墳であり、切石の石室を持つ旭塚古墳などの突出した規模・内容を持つ古墳や、渡来系の要素とされるミニチュア炊飯具を副葬する城山3・10号墳などの周辺地域には見られない特徴的な要素を持つ古墳が複数築造されている⁽¹⁴⁾。

城山古墳群の南方向に隣接して三条古墳群が分布する。この古墳群からは城山などでも見られるミニチュア炊飯具が出土しており、分布状況や立地においても同古墳群と類似する様相を持つことから、城山古墳群と同一古墳群であると考えられている⁽¹⁵⁾。しかし、様相は不明瞭な点が多く、本章では検討対象として保留しておく。

（3）山芦屋古墳

城山古墳群中の標高80m付近に分布する。工事中に発見され緊急調査が行われた。墳丘規模・石室規格・石室構造・副葬品などの要素において突出した内容を持つ。中でも、石室規模は芦屋市内最大級であり、規格・構造的にも、巨石を使用し、周辺地域には見られない正方形に近い平面形を持つ。副葬品においても各種須恵器類（杯身・杯蓋・高杯・百濟系細頸壺・器台）・水晶製三輪玉・ガラス製棗玉・ガラス製小玉・金銅装馬具（雲珠・方形飾金具・留金具・鞍骨）などの周辺地域の古墳と比較して優れた内容を持つ。これらのことから、旭塚古墳に先行する盟主墳であると考えられる⁽¹⁶⁾。

（4）旭塚古墳

城山古墳群中の標高78m地点に分布する。終末期に築造された古墳であり、多角形の墳丘を持つ。石室は横口式石槨の影響を強く受けているとされており、切石の石材を使用し、一部には播磨の竜山石が認められる。また、外部に土器類を多量供獻するためのテラス、その前方には葬送の儀式をするための広場が設けられており、この空間からも竜山石が検出されている。これらのことから、終末期の盟主墳であると考えられる⁽¹⁷⁾。

（5）業平1号墳

上記の古墳とは離れた現・JR芦屋駅付近の標高19mの平地部に位置する。石室は基底石付近のみを残して大半が破壊されている。六甲山東南麓地域の石室と比較し

て小型の石材を主に使用しており、出土遺物からTK10型式期に築造されたと考えられている。山芦屋古墳と併行する時期であり、芦屋市内において最古級の石室とされる。これらのことから、八十塚古墳群や芦屋神社境内古墳とは相違する時期に築造されていることになる⁽¹⁸⁾。

以上のように、芦屋神社境内古墳周辺には前後する時期に築造されたと考えられる横穴式石室を内部主体とする円墳を中心とした後期古墳群が複数分布している。特に、東に分布する八十塚古墳群と反対の西に分布する城山古墳群は、規模・副葬品などの各要素が相違しており、両古墳群の中間地点に位置する芦屋神社境内古墳とも合わせて比較検討することで、全体的な特徴・傾向などが判明すると考える。

4. 周辺の古墳・石室との比較検討

石室各部の計測値を用いて芦屋神社境内古墳と周辺に分布する石室との比較検討を行う。以下に各項目の検討から確認できた傾向・特徴などについてまとめる。

(1) 石室規格

石室規格について、有袖と無袖、玄室幅、玄室・石室長、羨道幅をもとにそれぞれの傾向・特徴を検討する。

まず、有袖式石室の玄室幅と玄室・石室長の比較について見ていく（図17）。山芦屋古墳のみ突出しており、玄室幅3.15m、玄室長3.6mの正方形に近い平面プランとなる。その他の古墳の多くは玄室幅1.3~2.0m、玄室長3.5~5.5m、玄室幅：玄室長 = 1 : 2 から 1 : 3 の範囲に集中する。芦屋神社境内古墳もこの中に収まる。一方、両袖式石室の玄室幅は1.8~2.0mでありやや広い。また、石室全長については残存状況の関係もあるが、両袖式石室は8.0~10.0mの範囲に分布しており、片袖式石室より石室全長がやや広い傾向が見いだせる。芦屋神社境内古墳の石室全長が最長になっているが、現状での数値であり、前述の通り本古墳の羨道部は後世の改変を受けているので、本来はこの数値より短くなる可能性が高い。ただし、墳丘裾の位置を考慮すると伸びる可能性も捨てきれない。

無袖式石室の石室幅と石室長の比較については（図16）、石室長は残存状況の関係もあり1.5~6.0mの間でばらつくが、石室幅については、0.7~1.5mの範囲に収まる。図18の有袖式石室の図と合わせると明らかかなように、無袖式石室の石室幅は有袖式石室の平均より0.3~0.5m程短くなる。

有袖式石室の玄室幅と羨道幅の比較については（図13）、ここでも山芦屋古墳が玄室幅3.15mとなり突出するが、羨道幅については1.7mとなり他の両袖式石室と類似する数値になる。その他の古墳はおおむね羨道・玄室幅ともに1.0~2.0mであり、玄室幅：羨道幅 = 2 : 1 から 1 : 1 の範囲に集中する。芦屋神社境内古墳も右片袖式石室の標準的な範囲に収まる。一方、羨道幅が1.5~2.0mになるものは両袖式石室に限られる。

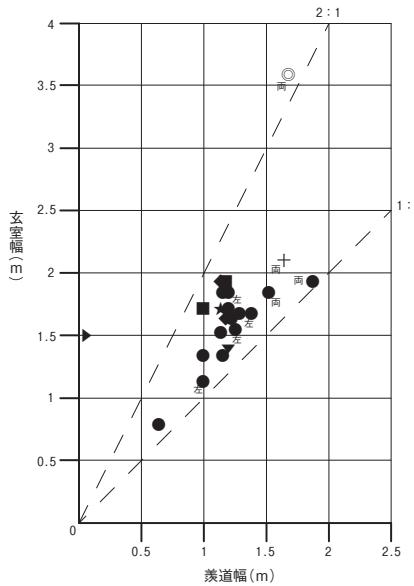
以上の検討から、芦屋神社境内古墳は、玄室幅と玄室・石室長の比較、玄室幅と羨道幅の比較のいずれの検討においても突出した様子は認められず⁽¹⁹⁾、各図中の分布集中域の中心付近に位置する。このことから、八十塚古墳群や城山古墳群などの周辺の古墳に多く見られるような石室規格を持つことが判明した。また、山芦屋古墳が羨道幅以外の石室内各部分において突出した規格を持つこと、八十塚古墳群岩ヶ平支群については様々な規模・規格の石室が分布することなども確認した。

(2) 石室構造

石室構造を検討するために、石積み技法と持ち送りについて注目する。

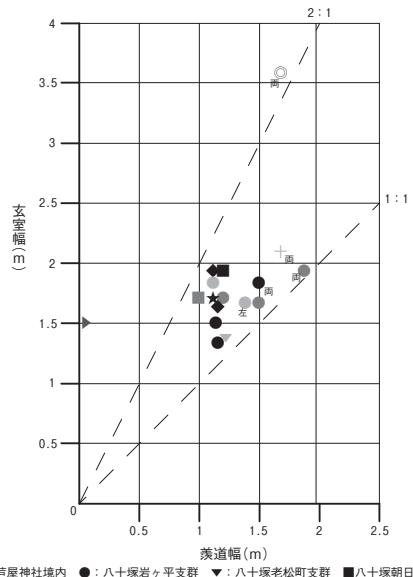
芦屋神社境内古墳の石積み技法は、大型石材の隙間に小型石材を充填するという方法を探る。同様の傾向は八十塚岩ヶ平1号墳・同老松3号墳・城山17号墳などに見られる（図21）。また、本古墳の石室は下半部の根石付近の石材は大型で正方形に近い形状のものが使用されているが、これと比較して上半部の石材はやや小型で横長の石材を横置きしている様子が見られる。同様の傾向は城山17号墳や八十塚岩ヶ平5号墳などで確認できる。特に城山17号墳については、袖部についても本古墳と同様に立石を用いていることが特筆される。これらと比較すると、八十塚老松3号墳は大半の部分で横長の石材が使用されている。また、八十塚岩ヶ平1号墳は、上記の各古墳と比較して全体的に大型の石材を使用している。以上から、芦屋神社境内古墳は六甲山東南麓地域の中では、城山17号墳と類似する石積み技法を用いていると判断できる。

六甲山東南麓地域の横穴式石室の中で、持ち送りが見られるものとして、芦屋神社境内古墳・八十塚岩ヶ平5号墳・同17号墳・同19号墳・同50号墳・八十塚苦楽園1号墳・同2号墳・城山17号墳の8基を想定している⁽²⁰⁾。芦屋神社境内古墳以外は天井部まで残存しておらず不明瞭であるが、八十塚岩ヶ平19号墳・八十塚苦楽園2号



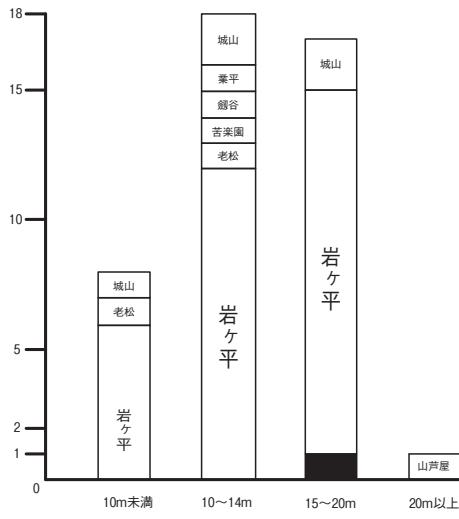
★：芦屋神社境内 ●：八十塚岩ヶ平支群 ▲：八十塚老松町支群 ■：八十塚朝日ヶ丘支群
◆：城山 ○：山芦屋 +：旭塚 ▶：秦平1号
両：両袖 左：左片袖 右片袖は表記無し
※秦平1号墳は羨道幅が不明なので、玄室幅のみ換算している。

図13 芦屋神社境内古墳周辺 石室玄室・羨道幅の比較



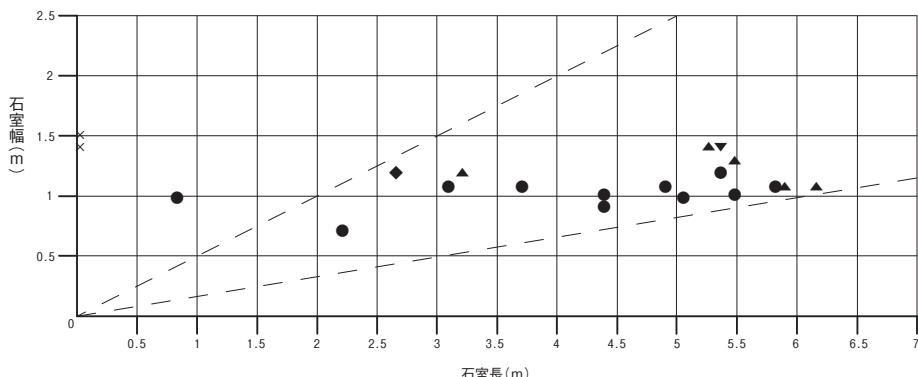
★：芦屋神社境内 ●：八十塚岩ヶ平支群 ▲：八十塚老松町支群 ■：八十塚朝日ヶ丘支群
◆：城山 ○：山芦屋 +：旭塚 ▶：秦平1号
両：両袖 左：左片袖 右片袖は表記無し
※秦平1号墳は羨道幅が不明なので、玄室幅のみ換算している。
■：TK43型式以前 ▨：TK43型式 ▨：TK209型式 ▨：TK209型式以降

図14 芦屋神社境内古墳周辺 石室玄室・羨道幅の時期ごとの比較



※黒塗りは芦屋神社境内古墳を表す。
岩ヶ平：八十塚岩ヶ平支群 老松：八十塚老松町支群 苦楽園：八十塚苦楽園支群 鶴谷：八十塚鶴谷支群
山芦屋：山芦屋古墳 楽平：秦平1号墳 城山：城山古墳群

図15 芦屋神社境内古墳周辺 古墳墳丘規模比較



●：八十塚岩ヶ平支群 ▲：八十塚苦楽園支群 ■：八十塚朝日ヶ丘支群 ×：八十塚鶴谷支群
▼：八十塚老松町支群 ◆：城山
※石室長は完存していないものなども含む。
※八十塚鶴谷支群の2基は、石室長が不明であるので石室幅のみ換算している。
また、無袖式石室でない可能性もある。

図16 芦屋神社境内古墳周辺 無袖式石室の石室幅・長比較

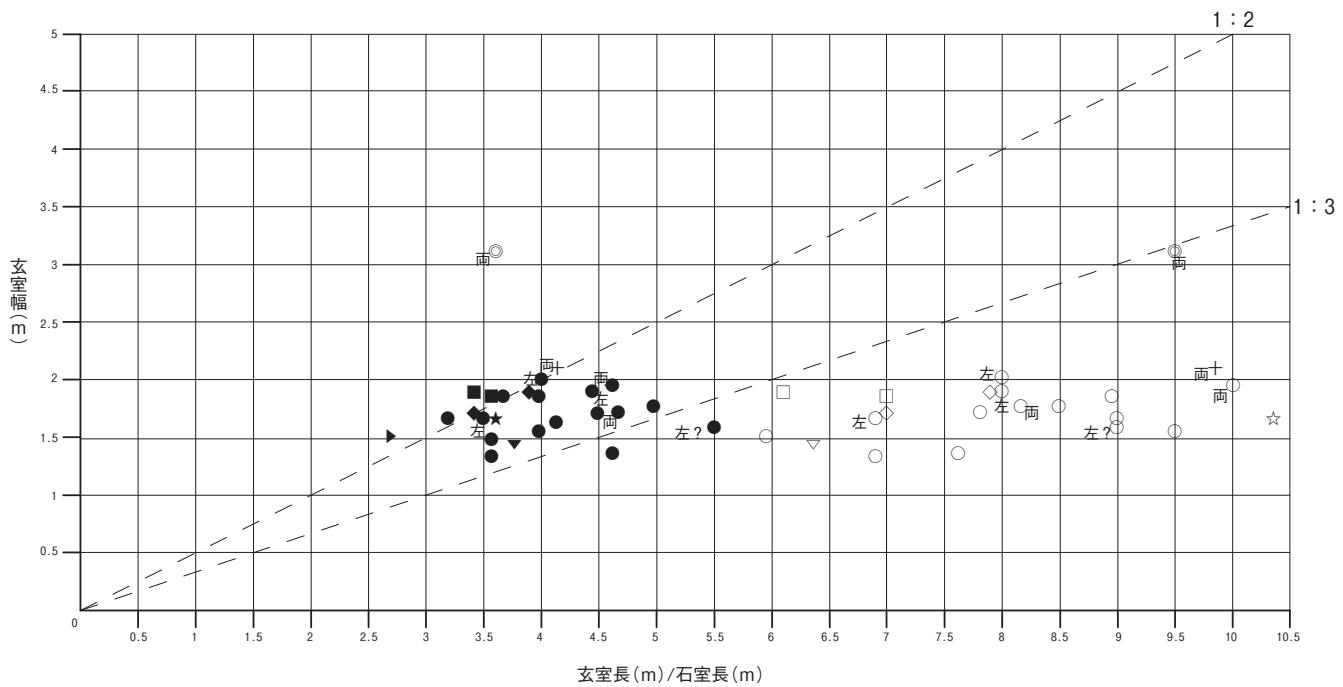


図17 芦屋神社境内古墳周辺 石室長幅比率

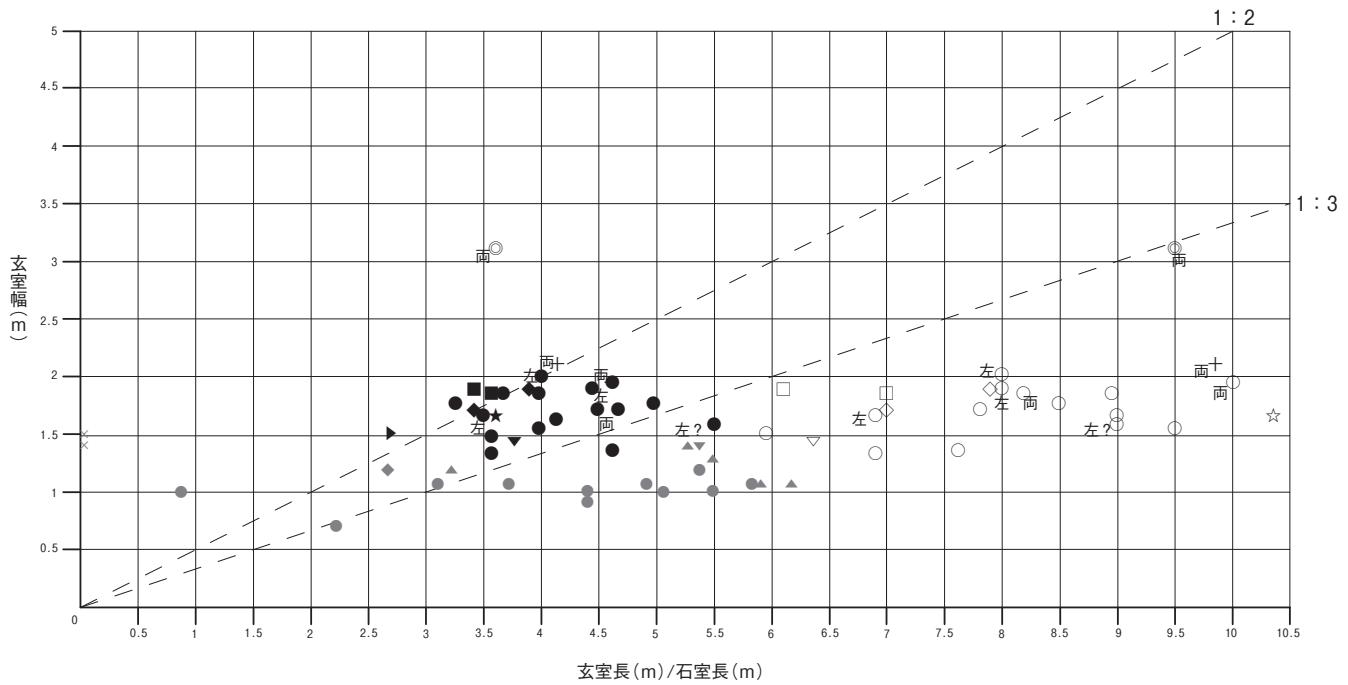


図18 芦屋神社境内古墳周辺 石室長幅比率 (無袖式石室を追加)

墳・城山17号墳については、意識的にそろえた持ち送りである可能性が高いと考える。これら上記の各古墳の持ち送り方を見ると、根石付近から全体的に緩やかに持ち送るものと、上半部付近で角を形成し屋根形に持ち送るものとの2種類の傾向が表れる。後者は芦屋神社境内古墳と八十塚苦楽園2号墳、前者は上記の2基以外となり、全体的に緩やかに持ち送るものが大半を占める。また、八十塚苦楽園2号墳についても、右側壁の角が不明瞭であることから、角を形成すると判断することには問題を残す。より広範囲の西摂地域全域で検討すると、東方向に位置する西宮市関西学院大学校内古墳や、北西方向に位置する宝塚市雲雀山西尾根B-2号墳などに角を形成し屋根形に持ち送る傾向が見られるが、石室各部の構造や使用石材の傾向などが相違する。芦屋神社境内古墳の持ち送りは残存状況が良好であることも関係するが、上半部で角を形成し、全体的に屋根形になるものであり、六甲山東南麓地域ではあまり見られない形態であると言える。

(3) 石室以外の要素

石室以外の比較検討要素として、墳丘規模と各古墳が立地する標高について取り上げる（図15）。

まず、墳丘規模については完存していると断定できる古墳が少なく、良好な検討対象とは言い難いが、今回の墳丘測量調査成果の総括の意味も含めてあえて取り上げる。図15に示すものは、円墳は径、楕円形墳は最大長（長軸）、方墳は一辺の長さをそれぞれ換算した。10m以下のものは8基存在し、八十塚岩ヶ平支群・同老松町支群、城山古墳群で確認できる。10~14mのものは18基存在し、八十塚岩ヶ平支群・同老松町支群・同苦楽園支群・同剣谷支群・業平1号墳・城山古墳群で確認できる。比較的広範囲に分布する規模である。15~20mのものは17基存在し、芦屋神社境内古墳・八十塚岩ヶ平支群・城山古墳群で確認できる。20m以上のものは山芦屋古墳のみであり墳丘規模においても突出した様子を見せる。芦屋神社境内古墳の墳丘規模は全体的に標準かやや大きい一群に入ると考える。また、八十塚古墳群中では、岩ヶ平・苦楽園・老松町支群において楕円形墳が複数確認されている。芦屋神社境内古墳も墳丘盛土残存部分（推定）は約9.5×6.0mの楕円形となっており、楕円形墳の可能性もある。

立地する標高について芦屋市教育委員会が1979年の報告にて、八十塚古墳群の各古墳の分布する地点の標高を

まとめている⁽²¹⁾。この記述を参考にすると、岩ヶ平支群は標高70~100mに分布しており、特に80~100mの範囲に集中する様子が見られる。朝日ヶ丘支群は90m付近に分布する。老松町支群は80~110mに分布しており、100~110mの範囲にやや集中する。苦楽園支群は100~120mに分布しており、110~120mの範囲にやや集中する。剣谷支群は140m付近と150m付近に点在する。また、城山古墳群については、芦屋市教育委員会が2011年の報告にて分布図を公表しており⁽²²⁾、この図から読みとると標高60~120mの範囲に分布しており、80~100mの範囲にやや集中する傾向が見られる。この中で旭塚古墳は標高78m、山芦屋古墳は80m付近に位置している。城山古墳群周辺に所在する三条古墳群についても、標高70m付近に分布している。芦屋神社境内古墳の標高は87.75mであり、上記の中では八十塚岩ヶ平支群・同老松町支群・城山古墳群と類似する地点に分布しており、立地に関しては周辺の古墳と比較して相違する部分は見られない。他に業平1号墳は、これらの古墳と離れた標高19mの平地付近に分布しており、六甲山東南麓地域の後期古墳の分布傾向を検討する際に留意すべき点である。

5. 芦屋神社境内古墳石室の位置付け

以上の検討結果をもとに、芦屋神社境内古墳石室の築造時期の判定と、六甲山東南麓地域における同古墳の位置付けについてまとめる。

(1) 築造時期

芦屋神社境内古墳は前述のように発掘調査が行われておらず、採取遺物も伝わっていないため、現時点での築造時期については石室の特徴により判定する方法に限られる。これまで7世紀代⁽²³⁾と6世紀末頃とする考えが提示されている⁽²⁴⁾。今回、石室の再実測調査を行い、石室上部が屋根形に持ち送る構造であることが新たに判明した。この特徴は6世紀末の石室に多く見られる。また、富山直人・奥田智子両氏が指摘するように、袖部は新しい要素を示しているが⁽²⁵⁾、玄室側壁や3段積みを指向する奥壁には袖部のような新しい要素は見られない。これらの石室形状の特徴から、同古墳石室の築造時期は6世紀末頃と考える。六甲山東南麓地域の中では、石室規格・構造的には城山17号墳と類似する部分が複数見られることから、同古墳と近似する時期に築造されたと推定する。

(2) 六甲山東南麓地域の横穴式石室の変遷

築造時期の検討結果から、芦屋神社境内古墳の築造時期は6世紀末頃、TK209型式期であるとした上で、六甲山東南麓地域の横穴式石室の変遷の様子を整理し、各時期に見られる特徴を検討する。なお、検討にあたっては、詳細な築造時期が明らかな古墳のみを対象としてとりあげる。

TK43型式期以前：当該時期の主な古墳は、TK10型式期の山芦屋古墳と業平1号墳の2基であり、該当する古墳が少ないとから詳細な様相は不明瞭である。山芦屋古墳は城山古墳群中に位置しており、前述のように当地域の後・終末期古墳の中でも玄室幅3.15m、玄室長3.6mの突出した規模・規格に豊富な副葬品を持つ。業平1号墳は、現状では後述するTK43～209型式以降に見られる一定の規格性とは若干相違する玄室幅1.5m、玄室長2.7mの石室を持つ。また、立地についても当地域で唯一平地に分布している。これらのことから、現状では当該時期にはTK43～209型式以降に見られる石室の規格性は存在していない可能性がある。

TK43型式期：当該時期には、八十塚古墳群のやや南側に位置しており、最も古墳が集中する岩ヶ平支群を中心

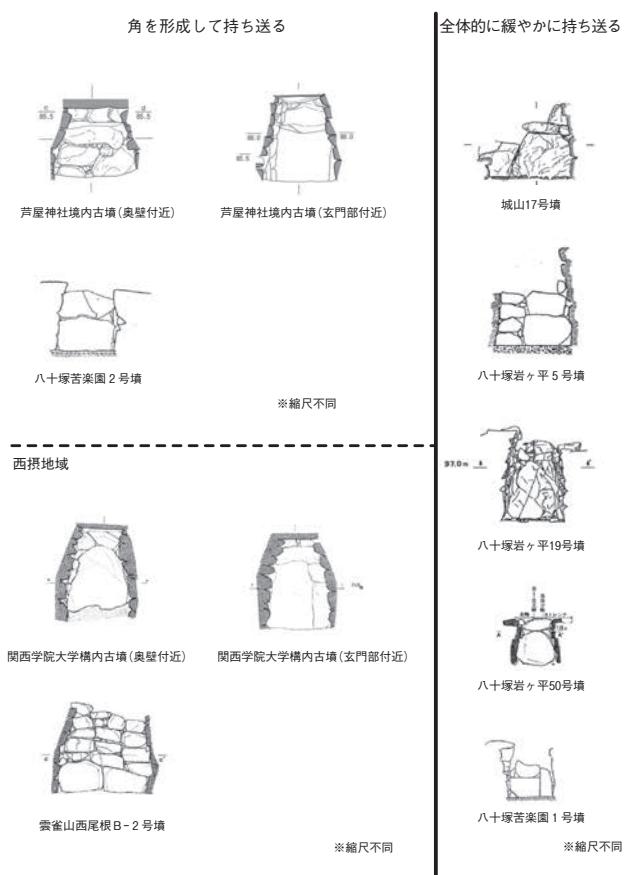


図19 芦屋神社境内古墳周辺 石室の持ち送り形態

心に、丘陵～山麓部に渡り古墳の築造が増加する。この時期の特徴として、各古墳の石室に一定の規格性が見られることがあげられる。具体的には、玄室幅と羨道幅はそれぞれ1.5～2.0mと1.0～2.0m、2：1から1：1の比率の間に収まる。玄室幅と玄室長についても1.5～2.0mと3.5～5.0m、1：2から1：3の比率の間に収まる。石室全長については、羨道部の残存状況に左右されるが、7.0～10.0mの範囲に分布する。これらのことから、当該時期には石室について一定の規格が出現し、特に八十塚古墳群岩ヶ平支群に顕著に見られることが確認できる（図14・20）。

TK209型式期：当該時期は八十塚古墳群の最盛期にあたる⁽²⁶⁾。特に岩ヶ平支群において多数の古墳が築造される。城山古墳群でも複数の古墳が築造され、芦屋神社境内古墳もこの時期に築造されたと考える。全体的に前代のTK43型式期の様相と近似しており（図20）、TK43型式期に出現した規格を保持している。石室全長については、5.8～10.4mの間に分布がみられる。前代と相違し、八十塚古墳群だけでなく城山古墳群・芦屋神社境内古墳でも近似する規格の石室が築造されていることから、周辺地域への石室規格や石室築造に関する技術・情報の伝播が行われた可能性が考えられる。また、無袖式石室が増加する。

TK209型式期以降：当該時期でも引き続き八十塚古墳群で活発な古墳の築造が見られる。岩ヶ平支群やさらに高所に位置する老松町支群・苦楽園支群にも造墓が見られる。城山古墳群では、終末期に突出した規模・内容を持つ旭塚古墳が築造される。このような状況で、有袖式石室については、TK43型式期から見られる規格を継承するが、無袖式石室が増加し、全体的に石室の小型化が進行する。また、旭塚古墳については、使用石材の大型化は見られるが、石室規格はTK43型式期からの数値と近似しており、石室自体の規格・規模はあまり変化しないと言えよう。

以上の検討結果から、六甲山東南麓地域の横穴式石室の変遷状況をまとめると、TK43型式期以前には、各石室に明確な規格性は見られない。しかしTK43型式期に主に八十塚古墳群岩ヶ平支群において、玄室幅と羨道幅がそれぞれ1.5～2.0mと1.0～2.0m、2：1から1：1の比率、玄室幅と玄室長についても1.5～2.0mと3.5～5.0m、1：2から1：3の比率に収まるという一定した規格が出現し、続くTK209型式期でもこれらの比率に近似した規格を持つ石室が八十塚古墳群だけでなく、

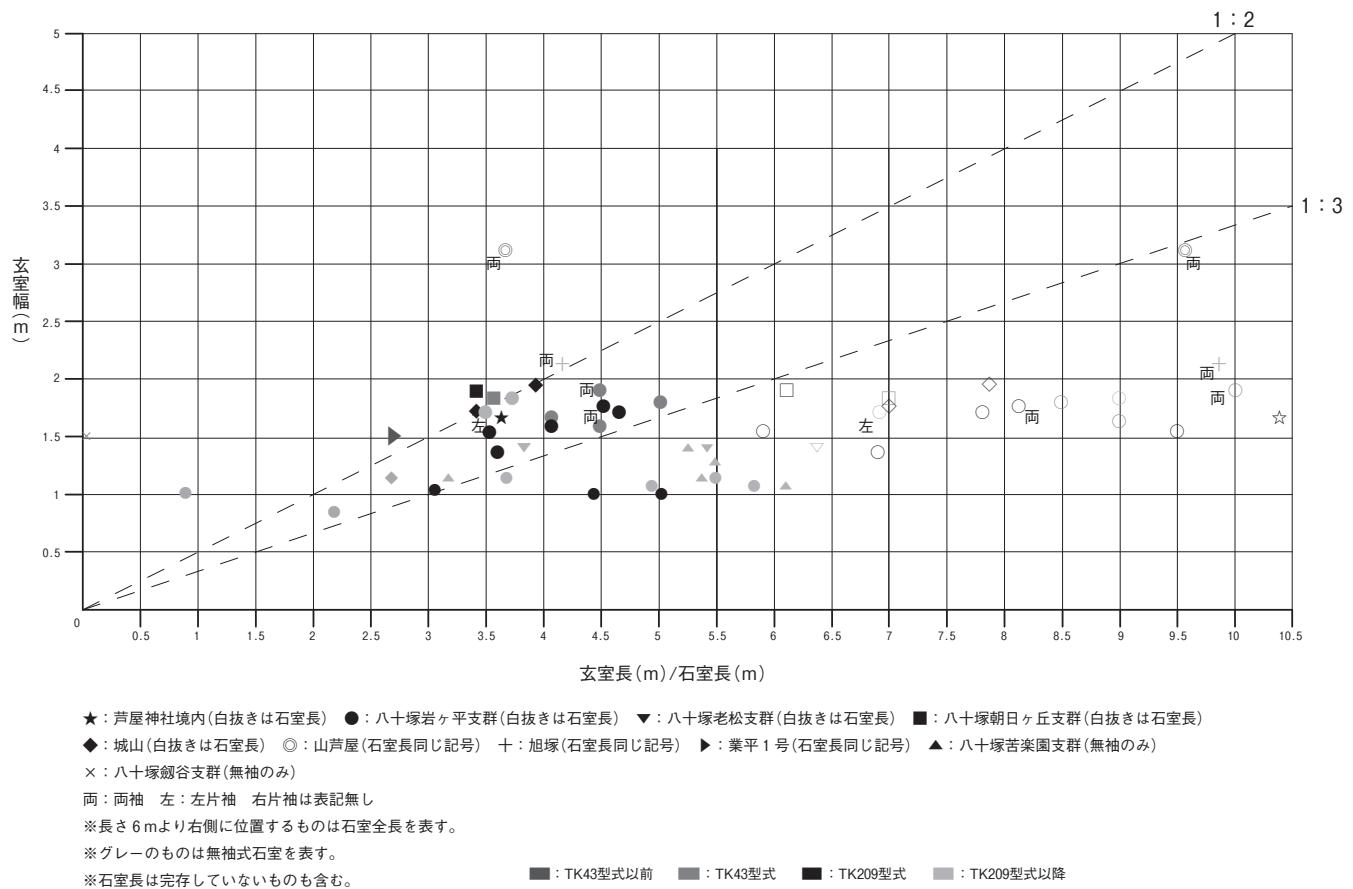


図20 芦屋神社境内古墳周辺 石室長幅比率（時期ごとの比較）

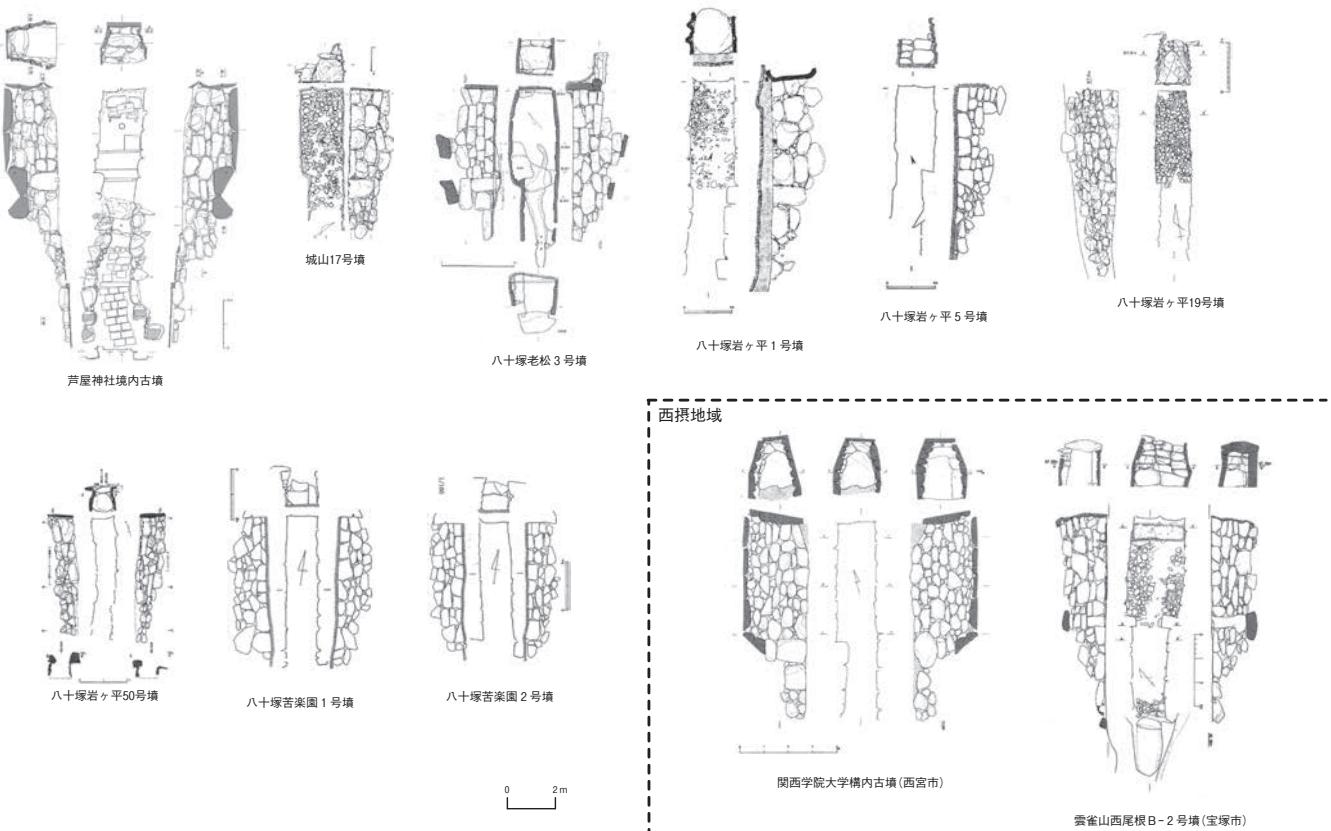


図21 芦屋神社境内古墳周辺 石室石積の比較

表3 六甲山東南麓地域の後・終末期主要古墳一覧

古墳群	古墳名	所在地	立地	墳丘	前方	平面	全長	玄室長	玄室幅	奥壁高	奥壁	前壁	側壁	后室各部斜微	備考	時期		
八丁塚 朝日ヶ丘支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚朝日ヶ丘1号	芦屋市山頂	山頂	圓	19	南	右片袖	10.1(6.6)	3.6	2.1	6.2(現状)	1.2(現状)	3~4段	立石・間接	4~6段	1段	持ち送り	
八丁塚 鏡谷支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚鏡谷2号	芦屋市山頂	山頂	圓	10	南	右片袖	7	3.6	1.7	1.5	1.7	1	1段以上?	立石	○	6世紀末頃	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平2号	芦屋市山頂	山頂	圓	17~18	南	右片袖	8.2	4.5	1.8	1.8	3.7	1.5	1段以上?	立石・間接	○	TK3	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平3号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	右片袖	9	3.7	1.8	1.8	5.3	1.2	4段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平4号	芦屋市山頂	山頂	圓	12~20	南	右片袖	約9	6.9	3.5	1.7	3.4	2	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平5号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	左片袖	約15	6.9	3.5	1.7	3.4	1.4	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平6号	芦屋市山頂	山頂	圓	9	南	無袖	5.45	7.8	4.65	1.65	3.15	1.25	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平7号	芦屋市山頂	山頂	圓	16	南	右片袖	9.5	4.35	3.5	1.9	5.4	1.35	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平8号	芦屋市山頂	山頂	圓	13	南	右片袖	5.9	3.5	1.5	1.3以上?	3.6	1.1	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平10号	芦屋市山頂	山頂	圓	12~13	南	右片袖?	約18	6.9	3.5	1.7	3.4	1.4	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平12号	芦屋市山頂	山頂	圓	17~18	南	右片袖?	約15	8	4.4	1.8(現状)	3.6(現状)	1.2(現状)	3段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平13号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	右片袖?	約9	0.8D.L.	約9	1.1	1.3	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?		
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平14号	芦屋市山頂	山頂	圓	10~11	西	無袖	1	1	1	1	1	1	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平15号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	左片袖	約8	約4	約4	1.2	約1	1	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平16号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	左片袖	約15	6.9	3.6	1.7	3.6	1.1	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平17号	芦屋市山頂	山頂	圓	10以上?	南	右片袖?	約15	6.9	3.6	1.7	3.6	1.1	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平18号	芦屋市山頂	山頂	圓	10?	南	右片袖?	6.9	3.6	1.35	1.3	3.5	1.4	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平19号	芦屋市山頂	山頂	圓	16	南	左片袖?	8~9	5.5	1.6	3.5	1.4	1.4	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平20号	芦屋市山頂	山頂	圓	10~16	南	左片袖?	約12	6.6?	1.1	5.44	5.44	1.1	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平21号	芦屋市山頂	山頂	圓	16	南	右片袖?	9.5	4.1	1.55	1.02	3.3	1.21	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平22号	芦屋市山頂	山頂	圓	7~7.5	南	右片袖?	3.08	4.42	4.42	4.42	3.08	1.02	3段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平23号	芦屋市山頂	山頂	圓	7~7.5	南	右片袖?	10	7.8	3.8	1.22	3.8	0.89	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平24号	芦屋市山頂	山頂	圓	11	南	右片袖?	1	1.01	1.01	1.01	1.01	1.01	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平25号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	右袖?	13~16	3.3	1.75	1.75	1.75	1.75	1段	2~4段?	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平26号	芦屋市山頂	山頂	圓	12~16	南	右袖?	8~5以上?	約5.0	1.7	3.3以上?	1.4~1.5	1.5	1段	2~4段?	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平28号	芦屋市山頂	山頂	圓	10~14	南	右袖?	4.41	4.41	4.41	4.41	4.41	1.01	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平29号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	右袖?	13~16	3.3	1.75	1.75	1.75	1.75	1段	2~4段?	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平30号	芦屋市山頂	山頂	圓	12以上?	南	右袖?	4.5?	1.6	4.5?	1.6	4.5?	1.6	1段	3~4段?	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平35号	芦屋市山頂	山頂	圓	10	南	無袖	5.02	0.91	0.91	0.91	0.91	0.91	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平46号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	右袖?	8~5以上?	約5.0	1.7	3.3以上?	1.4~1.5	1.5	1段	2~4段?	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平50号	芦屋市山頂	山頂	圓	10	南	無袖	5.02	0.91	1.5	1.4	1.4	1.4	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平51号	芦屋市山頂	山頂	圓	15~5.75	南	右袖?	9以上?	4.1	1.68	1.68	1.68	1.68	1段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平52号	芦屋市山頂	山頂	圓	7~4	南	無袖	5.43	4.83	4.83	4.83	4.83	1.05	1段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平53号	芦屋市山頂	山頂	圓	37~9.45	南	無袖?	15	5.75	1.14	1.14	1.14	1.14	1段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平54号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	無袖?	2.22	0.7	0.7	0.7	0.7	0.7	1段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平55号	芦屋市山頂	山頂	圓	2.5~5.75	南	無袖?	1.59	0.45	1.7	1.7	1.7	1.4	1段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平56号	芦屋市山頂	山頂	圓	10~7.2	南	右袖?	14以上?	9以上?	4.1	4.1	4.1	4.1	1段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平57号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	右袖?	15	5.3	1.4	1.4	1.4	1.4	1段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平58号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	右袖?	10~7.2	6.2	1.1	1.1	1.1	1.1	1段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平59号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	右袖?	15	1.07	1.07	1.07	1.07	1.07	1段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平60号	芦屋市山頂	山頂	圓	10~7.2	南	右袖?	10~9	3.76	1.4	2.04	2.04	1.38	2段?	立石・間接	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平61号	芦屋市山頂	山頂	圓	10~9	南	右袖?	10~9	1.37	1.37	1.37	1.37	1.37	1段以上?	立石	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平62号	芦屋市山頂	山頂	圓	10~9~11	南	右袖?	11~12	1.6	1.6	1.6	1.6	1.6	2段以上?	立石	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平63号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	右袖?	7以上?	3.9	1.2	1.2	1.2	1.2	1段以上?	立石	○	7世紀後半?	
八丁塚 岩ヶ平支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚岩ヶ平64号	芦屋市山頂	山頂	圓	10~10?	南	右袖?	10~9	3.35	1.18	1.71	1.71	2.4	1.28	2段以上?	立石	○	7世紀後半?
老松町支群	芦屋市正幾翁面 八丁塚老松4号	芦屋市山頂	山頂	圓	2.6~4.4	南	右袖?	5.3~8	5.38以上	0.9	4.8以上?	4.8以上?	4.8以上?	4.8以上?	2段以上?	立石・間接	○	7世紀後半?
城山古墳群	城山1号	芦屋市山頂	山頂	圓	14	南	右袖?	19~11	7.93以上?	4.78以上?	4.78以上?	4.78以上?	4.78以上?	1段以上?	立石	○	7世紀後半?	
城山古墳群	城山10号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	右袖?	7以上?	3.35	1.08	1.08	1.08	1.08	1.08	2段以上?	立石	○	7世紀後半?
城山古墳群	城山11号	芦屋市山頂	山頂	圓	15	南	右袖?	7以上?	3.35	1.08	1.08	1.08	1.08	1.08	2段以上?	立石	○	7世紀後半?
城山古墳群	城山17号	芦屋市山頂	山頂	圓	25	南	右袖?	10?	9.55	3.6	5.95	5.95	1.7	1.95	2段以上?	立石	○	7世紀後半?
山芦屋	山芦屋1号	芦屋市山頂	山頂	圓	10?	南	右袖?	2.7	1.5	1.5	1.5	1.5	2.1	5.7	2段以上?	立石	○	7世紀後半?
山芦屋	山芦屋2号	芦屋市山頂	山頂	圓	10?	南	右袖?	9.8	4.1	2.1	2.1	2.1	5.7	1.6	2段以上?	立石	○	7世紀後半?
旭塚	旭塚	芦屋市山頂	山頂	圓	多角形	多角形	多角形	多角形	多角形	多角形	多角形	多角形	多角形	多角形	多角形	多角形	立石	○

※単位はすべてmで表す。
※無袖式石室の幅について、玄室幅の部分に記入した。

※持ち送りの項目の角印は、形態として持ち送るもの。全体は、板石付近から全体的に緩やかに持ち送るものと表す。

城山古墳群内でも複数築造される。TK209型式期以降は、有袖式石室においては前代までの規格を残すものの、無袖式石室が増加し、全体的に石室の小型化が進行する。このような流れの中で、芦屋神社境内古墳が石室の特徴からTK209型式期の築造とすると、前段階のTK43型式期に出現した規格を保持・踏襲する石室を持つ古墳の中の一つであると位置付けることができる。

(3) 芦屋神社境内古墳の特徴

2013年度測量調査と本章の比較検討により明らかになった特徴などを以下にまとめる。

1. 石室規格は、八十塚古墳群・城山古墳群などの周辺に分布する多くの古墳と近似する。
2. 石室構造については、石積み技法・使用石材の傾向については同時期の城山17号墳と類似する。ただし、持ち送りについては上半部で角を形成し屋根形に持ち送っており、八十塚古墳群や城山古墳群ではほとんど見られない形状であることがわかった。西摂全域を見ると関西学院大学校内古墳や雲雀山西尾根B-2号墳などで先行するTK43型式期に屋根形になるものが見られる。
3. 石室以外の墳丘規模・立地する標高なども八十塚古墳群・城山古墳群と類似する。
4. 石室の特徴から、本章では6世紀末頃に築造されたと考える。
5. 六甲山東南麓地域の横穴式石室の変遷の中では、前段階のTK43型式期に八十塚古墳群を中心に出現した共通する規格を保持する古墳の中の1基に位置付けられると考える。

以上のことから、芦屋神社境内古墳は、現状では単独で分布している様子が見られるが、六甲山東南麓地域の周辺古墳と近似する石室規格を持ち、構造や石室以外の要素でも類似する箇所が複数見られることが明らかになった。このことから石室築造の際に周辺地域との技術的な細かな関与があったと考えられる。特に、石室規格の比較検討の図中では分布集中域の中心付近に位置しており、極めて標準的な要素を持つことが確認できる。六甲山東南麓地域の横穴式石室の変遷の中でも、前段階の八十塚古墳群を中心に出現した共通する規格性を保持する古墳の中の1基に位置付けられる。また、上記のように標準的な要素を持ちながらも、相違する要素として周辺の古墳にはほとんど見られない屋根形の持ち送りを持つことなどが明らかになった。

今回の調査・検討により以上のことことが確認できたが、石材関係のより詳細な比較検討や、石室の特徴の1つである奥壁最上段と天井石との関係についてなどの検討を行えなかった。また、より広範囲を対象に比較検討を行う必要があると考えるので、これらを今後の課題としている。

謝 辞

2013年度の芦屋神社境内古墳墳丘測量・石室実測調査では、芦屋神社・芦屋市教育委員会・芦の芽グループの皆様にお世話になりました。森下真企氏には八十塚古墳群の見学に、森岡秀人・藤川祐作両氏には文献や写真資料を提供して頂きました。末筆になりますが、お礼申し上げます。

注

- (1) 京都橘大学文学部2014「芦屋神社境内古墳墳丘測量・石室実測調査」『京都橘大学歴史遺産調査報告2013』。
- (2) 芦屋市教育委員会1979『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』。関西大学文学部考古学研究室2002『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究第7冊、武藤誠編1971『新修芦屋市史』本編 芦屋市役所、武藤誠編1976『新修芦屋市史』資料編 芦屋市役所など。
- (3) 注(1)と同じ。
- (4) 武藤誠編1971『新修芦屋市史』本編 芦屋市役所。武藤誠編1976『新修芦屋市史』資料編 芦屋市役所。
- (5) 注(4)と同じ。
- (6) 京都橘大学文学部2014「芦屋神社境内古墳墳丘測量・石室実測調査」『京都橘大学歴史遺産調査報告2013』では、「墳丘の中心部から径9.5m程が土饅頭状に盛り上がっている」としたが、「墳丘の中心部から径9.5×6.0m程が楕円形の土饅頭状に盛り上がっている」という記述に変更する。
- (7) 奥田尚2014「芦屋神社境内古墳の石室の石材と芦屋神社の石造物」『京都橘大学歴史遺産調査報告2014』京都橘大学文学部。
- (8) 関西大学文学部考古学研究室2002『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究第7冊、芦屋市教育委員会の各種発行文献など。
- (9) 芦屋市教育委員会1979『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』、関西大学文学部考古学研究室2002『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究第7冊など。
- (10) 西宮市教育委員会1977『苦楽園の古墳』西宮市文化財調査報告書第18号。西宮市教育委員会2014『八十塚古墳群苦楽園支群第5・6・7号墳発掘調査報告書』西宮市文化財資料第60号など。
- (11) 西宮市教育委員会2000『西宮市埋蔵文化財発掘調査報告書』西宮市文化財資料第44号など。
- (12) 注(4)と同じ。
- (13) 注(4)と同じ。

- (14) 芦屋市教育委員会2011『旭塚古墳 城山古墳群発掘調査報告書』芦屋市文化財調査報告第77集など。
- (15) 注(14)と同じ。
- (16) 芦屋市教育委員会2011『旭塚古墳 城山古墳群発掘調査報告書』芦屋市文化財調査報告第77集、芦屋市教育委員会1979『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』など。
- (17) 注(14)と同じ。
- (18) 芦屋市教育委員会2006『芦屋市業平遺跡第61地点月若遺跡第79・81地点 寺田遺跡第178・181報告書』芦屋市文化財調査報告第62集。
- (19) 芦屋神社境内古墳の羨道長・石室全長については、現状で突出しているが、後世の改変状況から本来の長さが不明であり、数値の詳細や評価については保留しておく。
- (20) 八十塚岩ヶ平17号墳については現在調査・整理中であり、現地観察により判断した。このため、今後正式な報告書が刊行された場合に、本章での見解を修正する可能性がある（芦屋市教育委員会2014「八十塚古墳群（第153地点）発掘調査現地見学会」現地見学会資料）。
- (21) 芦屋市教育委員会1979『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』。
- (22) 注(14)と同じ。
- (23) 注(4)など。
- (24) 富山直人・奥田智子2007『地域別解説 西摂津の横穴式石室』『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局など。
- (25) 注(24)と同じ。
- (26) 注(21)と同じ。
- 22集
- 芦屋市教育委員会1994『平成5年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 六麓荘町94番地（八十塚古墳群・徳川氏大坂城岩ヶ平採石場）』芦屋市文化財調査報告第25集
- 芦屋市教育委員会2006『芦屋市業平遺跡第61地点 月若遺跡第79・81地点 寺田遺跡第178・181報告書』芦屋市文化財調査報告第62集
- 芦屋市教育委員会2007『八十塚古墳群・岩ヶ平石切場 岩ヶ平第45・46・58号墳と第108地点の発掘調査成果』芦屋市文化財調査報告第67集
- 芦屋市教育委員会2011『旭塚古墳 城山古墳群発掘調査報告書』芦屋市文化財調査報告第77集
- 芦屋市教育委員会2012『原始から近現代へ—土中からのメッセージ—』広報あしや考古連載記事にみる
- 芦屋市教育委員会2014「八十塚古墳群（第153地点）発掘調査現地見学会」現地見学会資料
- 関西大学文学部考古学研究室2002『八十塚古墳群の研究』関西大学文学部考古学研究第7冊
- 京都橘大学文学部2014『芦屋神社境内古墳墳丘測量・石室実測調査』『京都橘大学歴史遺産調査報告2013』
- 西宮市教育委員会1977『苦楽園の古墳』西宮市文化財調査報告書第18号
- 西宮市教育委員会2000『西宮市埋蔵文化財発掘調査報告書』西宮市文化財資料第44号
- 西宮市教育委員会2014『八十塚古墳群苦楽園支群第5・6・7号墳発掘調査報告書』西宮市文化財資料第60号
- 西宮市立郷土資料館1994『八十塚発掘』第9回特別展展示図録
- 横穴式石室研究会事務局2007『研究集会 近畿の横穴式石室』
- 富山直人・奥田智子2007『地域別解説 西摂津の横穴式石室』『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局
- 武藤誠編1971『新修芦屋市史』本編 芦屋市役所
- 武藤誠編1976『新修芦屋市史』資料編 芦屋市役所
- 芦屋市教育委員会2003『摂津・藤ヶ谷古墓 藤ヶ谷遺跡第5地点・古代火葬墓の調査』芦屋市文化財調査報告第48集

参考文献

- 芦屋市教育委員会1979『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』
- 芦屋市教育委員会1986『埋蔵文化財調査メモリアル80～85』芦屋市文化財調査報告第14集
- 芦屋市教育委員会1992『芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書 平成3年度国庫補助事業 月若遺跡第12・14次地点八十塚古墳群岩ヶ平支群第50号墳』芦屋市文化財調査報告第

第6章

東六甲採石場甲山刻印群 (E・G地区) の踏査

1. 概 要

後述する山科（大塚・小山）石切場の調査方式を組み立てるために、研究到達度と遺跡の豊富な情報が残る東六甲採石場の踏査を行うこととした。本章では、既往の調査研究の概述を行うことでその基礎としたい。

1959（昭和34）年、大坂城総合調査の一貫として行われていた石垣の刻印調査で北・西外濠より「あしや」と刻まれた石材が111石確認されたものから、その存在が注目されるようになった。そして刻まれた文字が兵庫県芦屋市内を指し、東六甲山系の採石活動を示すものと指定された⁽¹⁾。

それまでにも西宮市や芦屋市一帯では、刻印石・矢穴石・調印石などが若干ではあるが報告されてはいた。

しかし本格的に調査が開始されたのは、1968年11月に歴史研究団体「芦の芽グループ」の小倉幸一氏（当時、県立芦屋高等学校の生徒）によって芦屋市青少年野外活動センター近くで刻印石（現在の奥山刻印群C地区）が確認されたことによる。

近世初頭、1620（元和6）年～1629（寛永6）年にかけて築造された徳川氏による再建大坂城の石垣については、これまでの研究で使用石材の半数近くが東六甲採石場から運ばれたとされてきたが、これについて東六甲採石場の調査研究は、近世城郭研究に大きな役割を果たした。

この石材分布地が「徳川大坂城東六甲採石場」として整理されたのは1979年11月のことである。西宮市甲山町に所在する兵庫県立甲山森林公園から神戸市東灘区の魚屋道付近の蛙岩まで

の東西6kmがその範囲とされた。周知の遺跡、埋蔵文化財包蔵地での取り扱いは、1982年3月からのことである。

地形的なまとまりから、城山（芦屋市、A～G地区）・奥山（芦屋市、A～M地区）・岩ヶ平（芦屋市、西宮市）・越木岩（西宮市）・北山（西宮市）・甲山（西宮市、A～G地区）の刻印群と認識して、分けられている。

刻印群という名称については、初期段階の認識が刻印を基礎とするものであることに由来する。

しかし、その後の調査が進展するなかで刻印の周辺に石材を割り取るための加工痕跡を有する石が存在し、石垣用石材を採取した遺跡の性格を伴うと考えられるようになった。

2. 環 境

徳川大坂城東六甲採石場は、主として神戸市東灘区・芦屋市・西宮市域の六甲山地南東斜面に分布する。

六甲山地は、北東～南西方向にほぼ30kmの山体で、山

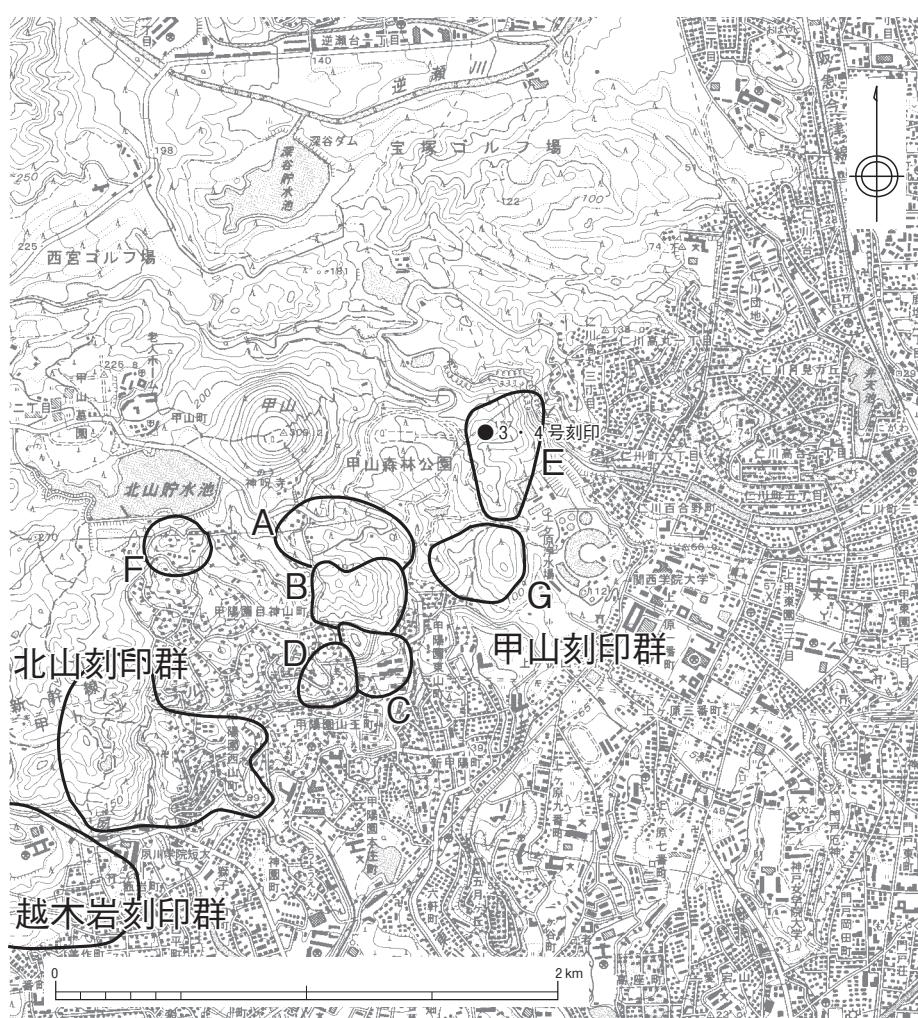


図22 東六甲採石場甲山刻印群分布図

地の伸びと平行な急崖とその間にあらざるこれら地域は断層と平坦面とで構成されている。西宮地域では武庫川の低地から順に（伊丹断層）→上ヶ原面→甲陽断層→北山面→芦屋断層→奥池面→五助橋断層→山頂尾根部へと続く。これはもともと平坦な地域が断層の運動によって隆起した。

その運動は特に東六甲で強く、六甲山地全体は西方向にゆるく傾動している。この結果、六甲山地の東部ほど浸食がすすみ深い部分の岩石が地表に表れている。そのため、隆起の著しい東部ほど風化していない新鮮な岩石が地上に現れる。

東六甲採石場の刻印群の分布を見ると、西宮市側（甲山・北山・越木刻印群）では主として北山面とその下部の急斜面に集中し、芦屋市側（岩ヶ平・奥山・城山刻印群）では奥池面下部の急傾斜部分および下部の緩斜面に集中する傾向がある。

3. 地 質

六甲山地の大部分は花崗岩石からなり古くから採石されてきたのは、このうち六甲花崗岩と呼ばれる岩石であ

る。花崗岩以外の石盤を構成する地質は、丹波層群・有馬層群・花崗斑岩などである。

丹波層群は泥岩やチャートなどからなり、ジュラ紀の海洋に堆積した地層である。有馬層群は、白亜紀後期に噴出した凝灰岩類からなり、六甲山地北部の有馬温泉付近から丹生山地に広く分布するほか、六甲山地南部に小規模に分布する。丹波層群および有馬層群は花崗岩類に貫かれ、熱変成作用を被っている。

花崗岩類は、早期の布引花崗閃緑岩と後期の六甲花崗岩からなる。六甲花崗岩は、六甲山地の主体をなし、古くから石材として使用されていたのはこの岩体である。中粒～粗粒の角閃石黒雲母花崗岩～黒雲母花崗岩を主とするが、細粒黒雲母花崗岩・中粒角閃石黒雲母花崗閃緑岩をともない、場所によっては細粒斑状名岩石や苦鉄質包有岩に富む不均質な岩相を呈することもある。

花崗岩類を覆う地層として新生代第三紀末～第四紀の大坂層群および段丘堆積物がある。大坂層群は、約250～20万年前に堆積した未固結～半固結の砂・礫層を主体とし、粘土層と火山灰層を挟む。後期には土石流堆積物も見られ、六甲山地の急激な隆起を物語っている。地形

形態	先Aタイプ	Aタイプ	Bタイプ	Cタイプ
平面形	○ ○ ○	□ □ □	□ □ □	□ □ □ □
断面形	W W W	U U U	U U U	W W W
(短辺)	V V	V	U	
特徴	<ul style="list-style-type: none"> 矢穴列には歪みがある 平面には長楕円形（割られた矢穴痕跡から推定） 断面は浅いU字形、または船底形 長さは10cm前後をかるが、矢穴痕ごとのばらつきも大きい 	<ul style="list-style-type: none"> 徳川大坂城東六甲採石場に伴う矢穴痕 割付線を用いて、直列に矢穴を並べる 	<ul style="list-style-type: none"> 平面は長方形 断面は逆台形または“コ”字形 長さに対して深さが大きい 長さ：10cm前後 深さ：10cm前後 	<ul style="list-style-type: none"> 平面は正方形に近い 断面は逆台形または“コ”字形 長さと深さは近似値 長さ：3 cm前後 深さ：3 cm前後

図23 徳川大坂城東六甲採石場 矢穴痕形態分類図

との関連では、大阪層群の最上部層は高位段丘面（奥池面と北山面および、それぞれの断層に沿った延長部に、大阪層群を覆うかたちで分布）を構成する。高位段丘層は、海水準が上昇した時期の氾濫原で堆積した砂礫からなる。そのうち、山地から河川の開口部では崖錐状の花崗岩巨礫からなる。

4. 周辺遺跡 神戸市の状況～市域の採石場の関連遺跡

(1) 市内東部地域内遺跡

東灘・灘区内に所在する郡家遺跡・住吉宮町遺跡・篠原遺跡の3遺跡4ヶ所で小規模な採石遺構が検出されている。いずれの遺跡も、土石流によって堆積した花崗岩バイラン土中に点在する転石を切り出した痕跡がある。

(2) 北神地域

凝灰質砂岩の分布地域で、北神ニュータウン内第5地点遺跡・第53地点遺跡において石切り場を発掘調査している。

第5地点遺跡は、尾根筋から垂直に8.5m掘削し、石を切り取った面はおよそ20mが水平な面として残されていた。その先は再び垂直に切り落とされていたが、端石や小端で埋め尽くされていた。岩盤表面のあちこちには、横方向に割り取るために設けられた幅5～7mの矢穴の痕跡が多数認められ、垂直方向の矢穴は割れずに残されているものもあり、 2.0×5.5 cmの長方形であった。また、矢鉄そのものも残されており、大割り用（採石）で縦割り用（ブツツケ）・横割り用（スカイ）と割採った後的小割り用が合わせて60点程度出土し、表面加工用と考えられる鑿も3点出土している。 $33 \times 33 \times 170$ cmの調整済みの石材が1点残されていたこととあわせ、このことから石切り場で仕上げまでの過程が行われていたことが推測される。

石切り場の時期については、石材運搬用と考えられる道から出土した馬の蹄鉄より廃絶時期が明治時代中期ではないかと推測されるが、開始時期については全く不明である。

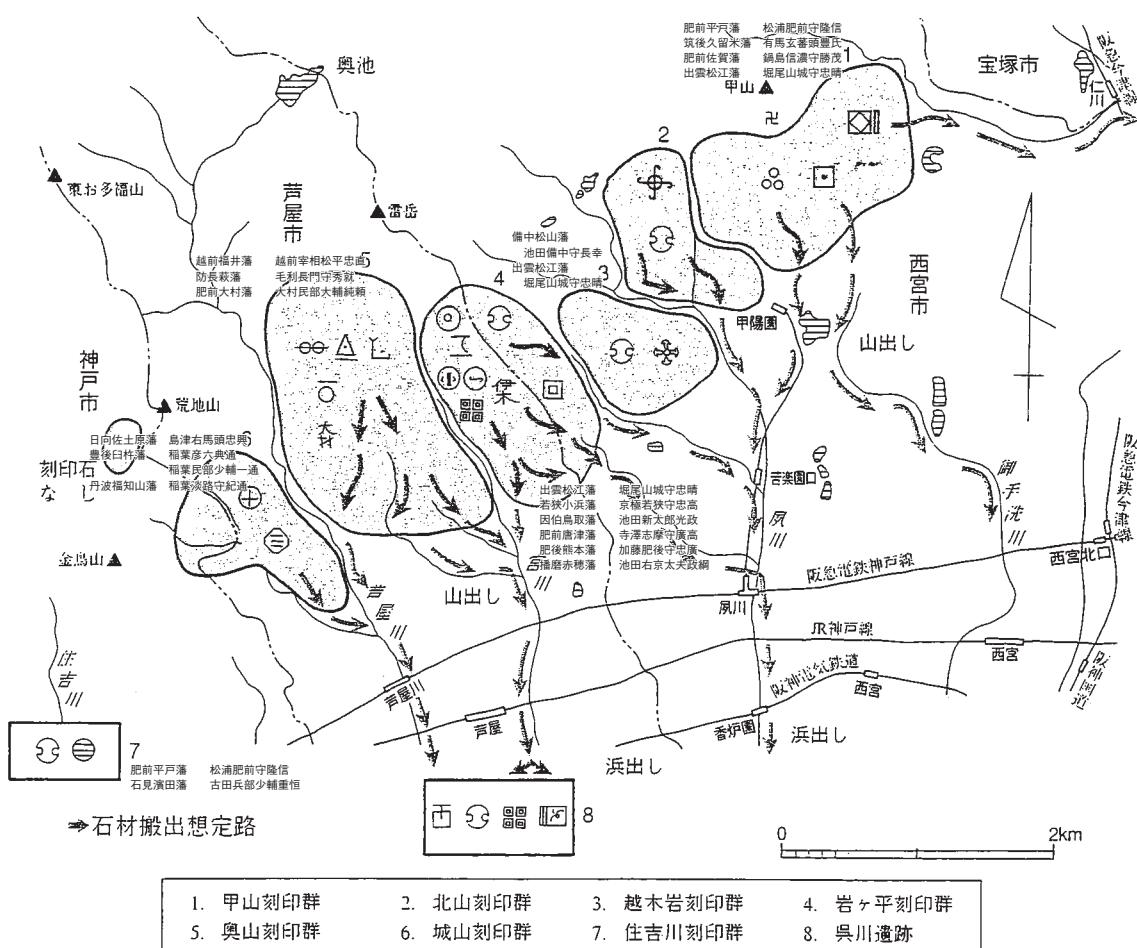


図24 德川大坂城東六甲採石場の刻印群・関連遺跡の検出主要刻印分布一覧と想定搬出ルート（森岡秀人氏図に加筆）

(3) 舞子丘陵

六甲山系の最西端にあたり、花崗岩が点々と露出する。古墳時代後期の横穴式石室密集地域であり、古墳の1基を調査中に附近で矢穴石の存在を確認した。

なお、丘陵の分布調査により、28ヶ所で矢穴石・割石が確認され「○」「-」「□」といった3種類の刻印も確認された。この3種類の刻印が明石城東の丸に多く使用されていることや地理的な関係から、明石市明石城築城に際しての石材供給地の1つとして考えられる。

5. 徳川大坂城東六甲採石場E・G地区について

本節では本学が踏査したE・G地点の概要を紹介する(図22)。

(1) E地区の位置

甲山刻印群地区は甲山を中心とする山塊部の東辺にあたり、その東側に広がる武庫川(仁川)の形成した平野部に並行して南北方向に伸びる尾根の稜線部を主体として広がる。なお、E地区の最東端に位置する展望広場からは、東の眼下に南流する仁川・武庫川を初めとして、



写真35 東六甲採石場甲山刻印群E地区No.3・4



写真37 東六甲採石場甲山刻印群E地区No.4

西宮市・尼崎市の所在する西摂平野から大阪平野・大阪湾さらには和泉地域までを一望できる。よって当時にあっては、当然大坂城も眺望できる位置関係にあった。

大坂城に向けて概観的にはE地区は六甲山系の南東隅部に相当することから、平野部に至るために東と南の方向に進むと想定されている。東側は阪神水道企業団甲山浄水場→上ヶ原(約700mの直線距離)→仁川に沿うように2.5m東進→一級河川・武庫川に入る。南側は県立甲山森林公園本体部分との間にある南側の小さな谷→みくるま池→甲陽園東山町→御手洗川沿いに西宮市立甲陽園小学校付近の谷口→東川がやや蛇行しながら南南東方向→津港となる(図24)。

なお、谷口部から阪急電鉄甲陽線に沿って南西方向に約900m進むと、香櫞浜までほぼ一直線に南下する夙川に至る。川幅・水量等の規模としては両者とも同等の河川であり、石材の搬出に際して水運を利用した場合、いずれともその役割を担った可能性が考えられる。

(2) E地区の内容

E地区は、甲山刻印群の中でも最も北東に位置する。石材群の散布状況をみると、展望広場の所在する尾根頂



写真36 東六甲採石場甲山刻印群E地区No.3



写真38 大阪城 刻印石広場の展示

部を中心とする地区（北群）とその南尾根頂部を中心とする地区（南群）に大別できる。さらに北群は、展望広場西側の山塊を中心とする群に刻印を持つ石・矢穴石とも極端に集中しており、E地区の中心的な採石場であったことがわかる。

E地区では12個の刻印が確認されているが、2個の「□」を除いて、どれも「□」と「◇」が重なった横に「□」がセットになる「□□」の形態であり、北群の展望広場西側山塊部に集中している。一方、「□」の刻印は展望広場山塊部の最東端に位置する石の上面と、G地区との間の鞍部にある石の側面にみられる（図24）。

また、北群とは新しい時期の矢穴石やそのコッパ等が局地面にみられることから、徳川大坂城に伴う採石活動以降においても、近世の採石場として利用されていたことが知られる。

（3）G地区の位置

西宮市甲山町に所在し、甲山刻印群E地区と同じく兵庫県立甲山森林公園内に含まれている。園地の南東部分を占め、みくるま池から続く甲山ダムを挟んだ東西の丘陵にあたる。

甲山刻印群の中では東部に位置し、北側に隣接してE地区、神呪寺大師道を挟んで西にC地区がある。

甲山ダムから続く谷筋には、みくるま池から流れ出る東川があり、御手洗川と合流して南下する。

（4）G地区の内容

藤川祐作氏が1982年に、「徳川大坂城、東六甲採石場（西宮市所在）」として分布状況を報告した⁽²⁾。同書によるとG地区では大師道から仏性原へ至る園路沿いに調査がなされ、E地区でも4箇所で「□□」刻印が分布が確認されている。「□□」刻印は、『大坂城普譜丁場割之図』などから肥前鍋島家との関係が考えられてきている。肥前佐賀藩鍋島家は「摂津国広田山」（現・甲陽園目前町）で採石したことが史料で確認でき、大坂城の佐賀藩担当石垣での刻印とも一致するという⁽³⁾。

（5）E地区の刻印と矢穴

さて、本年はE地区のなかでも良好に残石が集中する北群のNo.3・4・15～17を調査した。「□□」の刻印があるが、これはB・E・G地区にある。その特徴として

石材の小口にある見せるものではなく側面にある。

この刻印はNo.3と4に彫られ（写真35～37）、No.15～17は割石である。3は割れ面に1個の刻印がある。長さ209cmの調整石でAタイプの矢穴が2列ある。長辺の矢穴列は幅10cmの矢穴が14個が並ぶ。4も割れ面に1個の刻印がある。長さ76cmの調整石でAタイプの矢穴が3列ある。この周囲にはAタイプの矢穴のある3個の割石が広がる。この1群の現況と分析については、来年度にまとめたい。

6. 徳川大坂城東六甲採石場の遺跡地図・台帳記載までの課題

現在では、近世の生産遺跡とされる東六甲採掘場であるが、遺跡と認定されるまで、大きくは4つの課題があった。

- ①採石場の範囲があまりに広範囲で、詳細分布調査がなされず周知の徹底を図る途上の段階にすること。
- ②弾力的な取り扱いを要する埋蔵文化財保護において、遺跡の実態が十分把握できていないこと。
- ③複数の行政域をまたがって存在することをふまえ、共同理解と取り扱い上における齟齬の解消が求められること。
- ④現状の「緩やかな枠としての採石場・刻印群」の範囲と、保護が必要な「埋蔵文化財包蔵地としての枠」の整理が必要であること。

以上のようなことがらについて、2005年度から3ヵ年をかけ、文化庁の国庫補助事業で「徳川大坂城東六甲採石場 詳細分布調査」を行い、兵庫県教育委員会が編集して報告書を出している。本章はその報告に拠ったものである。

注

- (1) 本章では、『徳川大坂城東六甲採石場—国庫補助事業による詳細分布調査報告書』兵庫県教育委員会（2008）より抜粋した。なお、ここでは徳川大坂城東六甲採石場E・G地区にかかる部分を要約する。
- (2) 徳川大坂城東六甲採石場の調査と併行して7年間各地で採石場を踏査し、大小の矢穴痕をA・B・Cの各タイプに再整理（藤川祐作1979「採石場としての岩ヶ平」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第4集）した。図23はその矢穴形態を分類したものである。
- (3) 『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』西宮市教育委員会（1982）

第7章

山科（大塚・小山）石切場の踏査

1. 刻印・矢穴石の分布

本学の歴史遺産学科は山科にある石切場について、地元調査グループの中川亀造・武内良一・久保孝氏、そして芦屋市教育委員会森岡秀人氏などの指導を得て、そこにある既確認の石材の追踏査を本年度はじめて行った。

京都橋大学の裏山である行者ヶ森には巨石が多く含まれる。その中に刻印や矢穴の痕がつく石はある。これらについては、巨石探索の地元調査グループが行者ヶ森の山の頂上付近から東及び北斜面の大塚と小山の山中、すなわち、山を巻くようにして西に流れる山科・音羽川沿い、その上流域に集まることをつきとめている。武内・久保氏らによって『伏見城関連山科（大塚・小山）石切場』というレポートに詳しくまとめられている。

ただし、大学とともに大学の北に接して立地する岩屋神社近辺の斜面一帯では刻印や矢穴の痕がつく石は、今

のところ、確認されていない。主にその北の尾根をこえた行者ヶ森の西斜面と大学からは裏側になる東斜面付近に分布することになる。この大塚に属する地帯とともに、音羽・山科川をはさんだ北側対岸沿いの小山の方にも、一部、分布が拡がる。ここでは、仮に大塚西群・東群、小山としておこう（図25）。

2. 刻印の種類

刻印石は、ふつう石切丁場での採石グループをしめすと言われている。ここに所在する石切場には大きく2種類のものがある。一つは、一文字一星の毛利家の家紋略式刻印とされるものである（写真40・41）。「二」が付属するものがあり、毛利家の編成家臣団四組をさすと森岡氏は指摘する。

このほかに、山科の石切場では四角のなかに○の平四つ目結刻印や隅（角）立四つ目結刻印が確認されている（写真42～44）。これについては、刻印の初現期のものとしてや若狭京極家所用の可能性があげられている。一字一星が石英斑岩、四つ目が玄武岩質凝灰岩の分布地帯で石材自体も区別されたともみられる。ともかく、産地として、山地にふくまれる岩石自体にも注目する必要がある。

行者ヶ森頂上手前にある巨石には丁場割をしめすと考えられる一文字一星の刻印、谷を隔てて隅立四つ目結刻印も認められる。

3. 矢穴列のある石材

矢穴列のあるものについては、音羽・山科川の上流、大学の行者ヶ森のちょうど裏、音羽山にはさまれた川谷の岸にある石に古い型式のものが存在する。大きな楕円形の平面形、底は舌状のもので、矢穴型式からすれば、文禄から慶長初期にもさかのぼる。川谷だけでなく、丘陵斜面途中にクレーター状にくぼむ地形があり、その中に矢穴のある石材がある（写真39）。採石坑と考えられるものである。行者ヶ森頂上手前の丁場割を示すと考えられる刻印石の周囲及び、下方にむかっては、矢穴が残った多くの切石の残石がある。



図25 山科（大塚・小山）石切場位置図（図中の分布と数字は武内良一・久保孝 2014「大場山大名印石一覧」から作図）

4. 石材の搬出先

切石搬出先の一番の候補地は、矢穴で石を切ることが盛んになった関ヶ原合戦前後に徳川氏が再建した伏見城の石垣ということになる。山科の石切場からは南南西に12kmほどはなれている。山科の石切場から伏見城に運ぶなら、ほぼ山科盆地を縦断して石は動いたことになる。

かなり距離があるようと思えるが、石切場はそこから最短で近江に抜ける中間点という立地になる（図26）。一方、石切場から伏見城への区間の移動にあたって、山科川の端から端までを利用したことになる（図26）。これは重量物の石材は山、谷をこえる労力よりも、のぼりくだりのないなだらかで起伏のない川を下る方がはるかに軽減される。しかも、川底はコロレールとなり、川原石はボルバーリングの役割をはたす。行者ヶ森の山頂からは直線で伏見に向かうと西の大学側を通過する方が距離は短くなるのだが、これもやはり、まずは頂上付近から行者ヶ森を北側に半周するように上流に向かう山科川へ東に向かって石材を落とした方が容易であったと考えられる（図25）。また、採石にあたって岩屋神社という神域をさけていることも考慮に入れる必要があろう。

5. 伏見城の石垣

伏見城は3度立て替えられている。まずは、1594（文禄3）年、豊臣秀吉がそれまであった伏見屋敷を増築して伏見城（指月城）を築いた。ふつう、この頃は自然石積みの石材がほとんどである。1596（慶長元）年に激震があって、倒壊した。ただちに丘陵上へ第2次伏見城（木幡山城）が再建された。この頃から、割石積みになり、矢穴を用いて石を切ることが多くなりはじめる。しかし、第2次のものも関ヶ原合戦によって破壊された。その後、徳川家康が1601（慶長6）年から第3次伏見城を再建する。その際の石垣は、粗加工石積みに変化したと考えられ、矢穴がある石をともなうものが多い。さらに、1623（元和9）年の廃城後には、石垣石材は淀城や徳川大阪城に転用された可能性があり、山科の石切場からの石はそちらにも動いたことを考慮に入れる必要がある。

さて、現在、本丸天守台は明治天皇陵の敷地内にあり、そこに徳川築城期のものがのこる。三の丸南辺から四の丸にかけて2007年の下水道工事で出た刻印や矢穴のある石垣石が参道脇に展示される（写真45）。この石は元和から寛永の徳川家光による廃城のものかと宮内庁は推測

している（参考文献）。近鉄桃山御陵前駅近くの御香宮神社にも矢穴のついた石が集められる（写真46）。

6. 今後の調査の課題

現在、地元の方々と今後の調査についての方向を話し合っているところである。その内容については、まず急がれるものに、石材の分布調査の精度とその公表が急がれる。そのうち、この石切場に対しての歴史的な評価とその意義を図るために発掘調査を実施するとするなら、その方針や考え方をまとめ、対象とするもののしきり込みの必要もある。一般への周知や保存に対して具体的な方策案の推進も急務である。案内施設や遊歩道の実現可能な設置草案、それらの維持やスタッフの組織化への展望というのも課題としてあがっているところである。

参考文献

有馬 伸2009「桃山陵墓地下水道管布設工事に伴う立会調査」『書陵部紀要』第60号 宮内庁書陵部

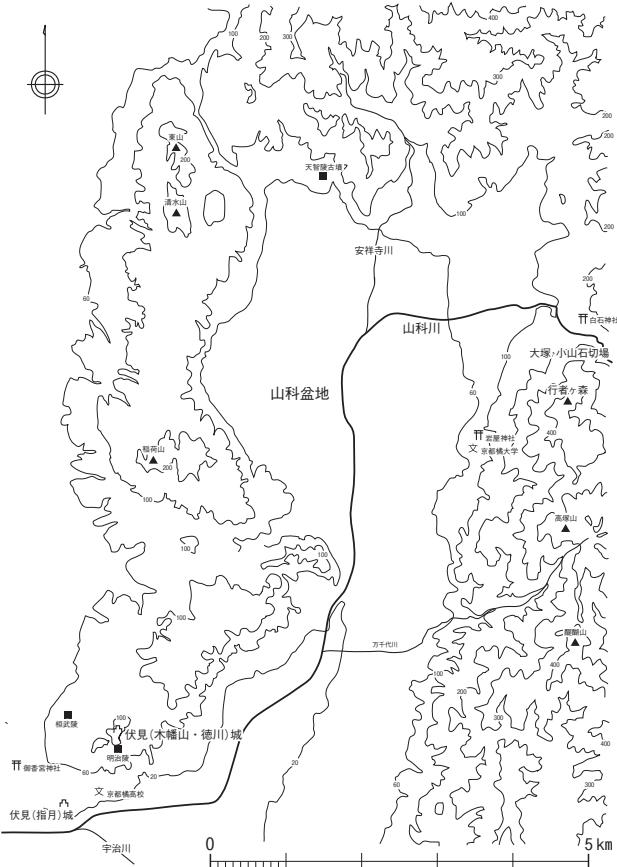


図26 伏見城と山科（大塚・小山）石切場関係地図



写真39 山科・大塚東群クレーター状採石坑



写真40 山科・大塚東群 一文字一星の刻印



写真41 山科・大塚東群 一文字一星の刻印詳細



写真42 山科・大塚東群 隅立四つ目結刻印



写真43 山科・大塚東群 隅立四つ目結刻印



写真44 山科・大塚東群 隅立四つ目結刻印



写真45 伏見城石垣石材の展示



写真46 御香宮神社 伏見城残石の集積状況

報告書抄録

ふりがな	きょうとたちばなだいがく れきしいさんちょうさほうこく							
書名	京都橋大学 歴史遺産調査報告 2014							
副書名	武曾学校、醍醐寺成身院（女人堂）、日根荘遺跡大木地区蓮華寺、芦屋神社境内古墳、東六甲採石場、山科（大塚・小山）石切場							
シリーズ名	京都橋大学 歴史遺産調査報告							
シリーズ番号	8							
編著者名	一瀬和夫 登谷伸宏 荒木瀬奈 岸 薫美 奥田 尚							
編集機関	京都橋大学 文学部歴史遺産学科							
所在地	〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL. 075-571-1111							
発行年月日	2015年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひねのしょういせき 日根荘遺跡 おおぎちくれんげじ 大木地区蓮花寺	いすみさのしおおぎ 泉佐野市大木	27213	105	34° 21' 03"	135° 22' 36"	2014年8月1・4 ～8・10～13日	2,300m ²	学術調査
あしやじんじゅけいだいこふん 芦屋神社境内古墳	あしやしひがしあしやちょう 芦屋市東芦屋町	28206		34° 44' 33"	135° 18' 09"	2013年8月1日～ 9月3日、 12月20日		学術調査
とくがわおおさかじょう 徳川大坂城 ひがしうっこさいせきじょう 東六甲採石場	にしのみやしかぶとやまちょう 西宮市甲山町他	050090	050090	34° 46' 30"	135° 20' 18"	2014年11月 1・8・9日		学術調査
ふしみじょうかんれんやましな 伏見城関連山科 おおつかこやま (大塚・小山) いしきりば 石切場(仮称)	きょうとしやましなくおおつか 京都市山科区大塚・ こやま 小山	26100	641	34° 58' 25"	135° 50' 16"	2014年11月15・ 29日、 2015年2月28日		学術調査

京都橋大学 歴史遺産調査報告 2014

武曾学校、醍醐寺成身院（女人堂）、日根荘遺跡大木地区蓮華寺、
芦屋神社境内古墳、東六甲採石場、山科（大塚・小山）石切場

発行 京都橋大学 文学部

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL 075-571-1111

発行日 2015年3月31日

印 刷 (有)真陽社

〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル TEL 075-351-6034



京都橘大学

KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY